主幹・麻生路郎

川柳雜誌

九月號

大正十三年八月三日第三種郵便物認可
昭和三年九月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌　第五卷　第九號

川柳雜誌社發行

柳珍堂忌

▼日時　九月八日午後七時
▼場所　南區日本橋一丁目交叉點北の辻東入　日本橋倶樂部
▼兼題　「集金人」三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

柳翁忌

▼日時　九月廿二日午後六時半
▼場所　南區日本橋一丁目交叉點北の辻東入　日本橋倶樂部
▼兼題　「彼岸」三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします、柳界のため且又「川柳雜誌」のために眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい、

川柳雜誌　第五卷第九號　目次

感想・評論

題の出ぬ句會　相元紋太
川柳家の危機　忠萬よし
漱石さんと猫　長野吉高
再び半文錢君に與ふ　三好草郎
根を培へ　岩本素人

研究・其他

唐柳短解　蛭子省二
月評　紋太、山雨樓　素人、多聞、町二
古句質疑　蛭子省二
キャンピングの夜　松盛琴人

一路集（募集句）

魚釣　篠原春雨選
唇　大島濤明選
看護婦　青紙　可明　共選
青明忌　安井ひろし　楊井二南報
川柳家戸籍調　安井ひろし
各地柳壇　吉田清
彼岸（表紙）　小出檜重
題字　酒井駒人　松盛琴人
横田眠聲　西本三笑
岩崎柳路　庄萬よし
橋本二柳子

◇

創作

川柳塔
松丘町二　石川双葉子
水谷鮎美　島田翠峰
中澤濁水　兼重白鷗
朝田新水　中見光路
安西杏三　越村加香
楊井二南　中島鐵洲
長谷川一徹　桑原京郎
中野柳陽　檜山千代二

粒々集
富士野鞍馬　長崎柳秀
近作御樽　諸家

編輯後記　革郎生

近作柳樽

路郎選

藥禮は滯りなくやせて居る	別府	晃卓
友の訃は俺の一生をちこけづり	同	同
初夏を女は線で見せて居る	同	同
好き合ふて添ふて意見が斯く違ひ	同	同
もうかんもかんざも知らず醉ふて居る	同	同
我慢してこらへて居るに顔へ出て	同	同
いやな顔するなと云へば涙ぐみ	同	同
社へ出てく振りして相場はつてゐる	豐中	石竹
夕刊を買ふて此の子と同ひ年	同	同
乳のはる夢からさめて子をさがす	同	同
今迄は今迄だもつこはなさぬか	同	同
妻へなつかぬ子を裁いて出る	同	同
一圓をもつて友達きたりけり	神戸	竹木
ふるさとへかへれば山に雪ありて	同	同
炭とりの端に小さくゐたりけり	同	同
凡人でありしゐらさが文にあり	同	同
父のこゝなほ思はせる酒の味	同	同
云ひわけをこしらへ醉ふて居ればよし	同	同

笑はせてかたきを打つたつもりなり　島根　花情
攻撃をされるぐらいになれと父　同　同
ひこをけなして人間振らんこす　同　同
世の中はごくだみを喰ふ虫もあり　同　同
金は貯めたが皺をごうする　同　寂郎
俺ならばもつこうまくこ皆思ひ　螢ヶ池　同
宗教のなんのこ固うならいでも　同　同
穀潰し僕等ばかりじやないでせう　同　同
雨聽いて早寢するのも幸福か　同　同
横着に厚かましふに振舞はむ　同　同
眠つても不公平なる世の中よ　大阪　露斗
立志傳でも讀んで眠むらん　同　同
一生の死を選ぶ日を今こ知た　同　同
人間の行くべき道の數多し　同　同
今日も雪明日も雪が降るのです　北海道　故常子
弟のにしんをそつとたべてやり　同　同
朝顔の屋根をこす氣の根氣よさ　同　同
再會を母は佛の加護にする　同　同
だい〳〵をしがましてやる男親　神戸　鎌月
遠山がうつくしい日の腕時計　同　同
あによめこそして母この雜誌なり　同　同
藝術がわかる貧乏かと思ひ　同　同
弟こ出過ぎたお茶で飯を食ひ　同　重陽子
貧しさに眞心さへも疑はれ　同　同

つみとつて見れば大きな足の爪　同　同
チト鼻の高い人形をかみに据へ　同　同
嬉しさにいきなり吃る手を握り　大阪　伴内
晝の酒そのまゝ父に灯がともり　同　同
そくばくの金にも母の鬱ぎやう　同　同
男の子父の散歩を待ち伏せる　同　同
見下ろせばわが町を汽車走るなり　神戸　駒作
はたらきに交番のまへ横切つて　同　同
こゝらでは工場をかこみ家があり　同　同
父からのたよりはきれて九月なり　同　同
三十を過ぎた白粉燒け淋し　長春　菱明
この椅子で通してきたる平社員　同　同
五人の子妻の心に隙きもなし　同　同
出勤の心つまづく服の皺　同　同
いさかいの娘はむしあつく家にゐる　大阪　凡平
妹の便りは母の病み事　同　同
親切の外に男の手が伸びる　同　同
年寄が坐り座席を狹ふする　同　同
勸誘員です紹介を願ひます　大阪　正吉
カフェーのマッチを貯めて二十八　同　同
日傘のぞくに人力のチト高し　同　同
金がありやもつと陽氣になりまする　大阪　其象
迷子の只暖やかな方へ行き　同　同
稻妻に亭主の方がうろたへる　同　同

弱い者元利の外に何か添へ　鞍山　草明
一秒の五分の一で一二善　同　同
うつちやつて置けは無邪氣に寢て居る子　同　神戸　志郎
善い方へ解釋されて見込まれる　同　同
あからさまに云へばお前は逃げるだろ　同　同
貸し本の間から豆の皮が落ち　同　同
お隣りの主人を妻に敎へられ　同　豊中　閑生
魂をふたゝび入れて蠅は飛び　同　同
奥の間に忘られてゐる兒の晝寢　同　同
獨り者は行きて歸らず天の川　同　大阪　梢雨
繃帶のほごき了ひに目をつむり　同　同
脊の君が焚つけを割る傍へ立ち　同　同
人事欄先づゴジツクに目を配り　同　同
お土産の玩具その場ですぐ毀れ　中河内　泰平
癒つたらウンと勉强する氣でゐる　同　同
諒解の後に淋しさだけ殘り　同　同
汁の實のやはらかくなる三月よ　神戸　山果
ごんなにか父を思へど金はなし　同　同
不幸者會へばさみしい男なり　同　同
病人の案外食へるのを笑ひ　同　小蓬
任せ切つた事にくちばし入れたがり　同　同
用立てゝ來た紋付も褪せてゐる　同　同
傾いてゆくを云ひつゝ通りすぎ　同　徳島　休歩
おかひこに納税だけを委しさき　同　同

大學をでたと思へばあそんでる　同
元祿は墓迄揃ふ派出な事　東京　太閤
傷ついた肌を心に看護服　同　同
濱寺は海の方から見るも景　同　同
覇氣もなく親の遺産を喰べて居る　大阪　虚白
骨相のいゝおつさんが芋を燒き　同　同
位置や守らん頭や下げん　同　同
私には金のない樣なふりもせず　大阪　ワン公
勸銀へ禮を言ひたく見て通り　同　同
呼び止めて置いて施しするも母　同　冷笑
高らかに笑へぬ程にひがんでる　同　同
何のかの云ふてる内に戀になり　同　籬楓
から返事して世渡りが上手なり　同　同
東西屋電車に乘れば汗を拭き　同　忠八
ありしBの戀を女房は聞きたがり　同　同
妾宅の二階を借りて面白し　同　柳坊
愛の巢に今朝の漬物ないの也　同　同
魚屋は客を逃がして水を打ち　同　幸泉
賣切れは旗をたんで歸るなり　同　同
洋裝は良いが小さい女なり　同　豚二郎
挨拶をするより前に家を賞め　同　同
近代美鋭く迫る唇よ　同　愚陀
金におゝれし女の黒髪　同　同
病上り手首をはかる癖がつき　同　惡源太

貰ふ氣もないに容貌なども聞き　同　同
同性も見返る程の魅力にて　兵庫　珍郎
あの時にだました罪ときめて病み　同　同
結ひ立てを氣にして使ふ火吹竹　堺　太路
國自慢中に少こうし嘘を交ぜ　同　同
同僚の今の若さで貯めて居る　西灘　笑人
笹舟のあくまで水にさからはず　同　同
唇を嚙んで女給は自嘲する　石川　錦水
友禪で明るく見える女給部屋　同　同
貧乏へ動員令のおごそかに　姫島　二竹

三女を思ふ（一句）

玩具屋でぢだんだふんだ事もあり　同　同
貸すのにも頭を下げる氣の弱さ　同　觀月
すぐ治るさこを時計屋日がかかり　同　同
撥合す事を知らずに憎まれて　丸龜　柚蘭坊
うちの子ならぶちのめして足らない氣　同　同
尻据えて母の強さを示したし　神奈川　城月
蚤の跡數へて母は着替させ　同　同
金力へまさもに馬鹿とのしれず　池田　白蝶
唄をほめるに破産したこさも云ふ　同　同
みな意地になつて意見を違へて居　長野　高峰
孕んでる仲さも知らず意見する　同　同
唇の先き光明を見付けしか　金澤　三波子
唇を今眞實は溢れ出る　同　同

いゝ夢を母に見せたく思へども　神戸　清公子
人間を金に換算した辭令　同　同

十年振りの東京にて（二句）

梅園へ子供心が連れて行き　大阪　雅幽
滅さぬ氣亡父の寫眞引伸ばし　同　同
身の程も知らず及ばぬ戀になれ　大　雪峰
ひしやがつた樣に女給眠つてる　同　賀名芽
戀心を連の連から聞かされる　同　月下
まごゝに一つ違ひの親子出來　同　丸葉
その人夫困る巡査に通譯し　同　翠川
鐵砲をもう忌れたか歌ふてる　同　新一郎
最う少し讀みたい所で電車着き　同　夢坊
再婚の何處か遠慮が見ゑてる　同　柳笑
惚れられて見れば男の氣まぐれに　同　雨迷
首と首湯舟の中で話し合ひ　同　變骨
一代に蓄めて中風の憐れさよ　同　陽喜亭
うけ容れるすべを知らざる戀でした　同　彩秋
僞名とも知らず女中は名をほめる　同　廻天童
三ツの兒とう〳〵親に泣いて勝ち　同　佳風
求職は敷居の高い家も訪ひ　同　柳狂
長靴の少しだてでも降つて呉れ　同　南天
戀文へ泣いてゐるこゝ書いて來る　同　三次

金儲けする氣が損を又重ね　同　一舟
日曜日和服の事でもめて出る　同　萬古
盜電へ虫が澤山よつてくる　神戸　華水
かひ摘み云ふにつまりが多過ぎる　同　鐵庵
伯父ちやんと言ふなよ僕はまだ若い　同　千鳥
お早くとせきたてられて次のにし　同　卯生
口笛口笛夏の夜を越へて　鳥取　緑之助
仰山な人と看護婦思ふ日や　同　穂波子
農繁期子供が子供負わされる　同　耕民
いつそもう夜逃げときめて樂に寢る　同　湖山
筆勢をほめて子供の年をきゝ　同　青水
線路をばてくつて居るを知ろまいが　香里　有陀
梅雨だとておむつは洗ねばならぬ　尻ヶ崎　文月
二の腕をそツと出されて怖いなり　東京　雨月
裏切つた女へも來る淋しい日　同　竹葉子
五月雨に蛇の目がほしいポストなり　神奈川　粹狂
數へても〳〵人の金ばかり　筑前　郷川
喧嘩からどつちも負けぬ酒になり　近江　武
勤續の一萬圓に手が屆き　長春　東狂子
おせつかいなぞと忠告罵られ　螢ヶ池　光所
當つても見たがつかれるだけの事　同　定義

漱石さんと「猫」

長野吉高

夏目さん自身が言つてる通り、この『猫』は夏目さんを有名にした第一の作物である。流石に、夏目さんでなければ、書けぬ作物である。

誰か知らぬが、この『猫』の續篇を書いてゐた人が有つたと思ふ。この作者は、夏目さんの『猫』を生かす積りで書いたのだらうが、惜しい事に、生きてゐた夏目さんの『猫』迄この作者は殺してしまつてゐる。

甕の中に落ちた『猫』は、落ちたで其れでいゝ、なまじつか、棒切れや竹切れを突込んで助け樣とすると、助かる『猫』迄もいびり殺してしまふ樣な事になる。

吾輩は死ぬ、死んで此太平を得る、太平は死なゝければ得られぬ

南無阿彌陀佛々々々々々々有難いく。

『猫』は立派に覺つてゐる。假りの生、を脱して永遠の生、に生き樣としてゐる、迷夢を破つて、まさに往生安樂國と言ふ所である。

猫生不精進喩若樹無根採華置日中能得幾時解猫命亦如是

往生禮讃の念佛でも唱へて、靜かに合掌してやる事が『猫』に對しては大きな功德にならうではないか。私は、この『猫』を甕から引張り出した人をにくむ。よしや甕から引張り出した、と濟ましてゐるにせよ『猫』は既に死んでゐる。魂の抜けた張子の猫と同然である。『猫』を引張り出す事は、『猫』の前の生涯を汚さす事になり、折角の『猫』の意義有る前生に、泥を塗らす事になる。

『猫』に對して、決して其れは親切なる行爲と言ふ事は出來ぬ引張り出した人は、其んな事はニヤンとも思はずにやつた事に違ひないが、さりとは『猫』も迷惑至極な事と言ふべきであら

う。

近松秋江さんが、中里介山さんの『大菩薩峠』を、續篇に依つていさゝかだれ氣味なるを指示し『金色夜叉』の續篇と同樣に惜しいと言つてゐるが、此の點私も至極同感である。單なる生のみを知つて、永遠の生を知らぬ者は、未だ眞に知るの人、と言ふ事は出來ぬ。『猫』が再び生きかへつて、ウロ〳〵とした事を、私は夏目さんに大變に氣の毒に思つてゐる。『猫』を獲から引張り出した人は、其の罪『猫』の前に百拜の、いや千拜の償があらう。強ひて生かしたければ其れもいゝ。然し『猫』を引張り出す前に、『猫』をよく見る必要がある。折角引張り出しながら、『猫』の養生も出來ない樣な事では何にもならない。

もう一度言ふ。私は『猫』を獲から引張り出した人を心からにくむ。

『猫』は、慥に夏目さんのくわい心の作だつたらう。あれを讀んだ者は、流石に夏目さんだ、と言つて感心する。私も其の一人だ。夏目さんには此んな事を言つて濟まないと思ふが、然し私の思ふ所をブチまけさして貰へば、あの『猫』は、何處となく氣障な所があつて、鼻について困る。氣障なのも、時によつては愛嬌になるが、あんまり其の度が過ぎると一寸、がつかりさせられる。

『猫』は物識りである。苦沙彌先生の家に居るだけあつて、ギリシヤ語も饒舌れば、ラテン語も引張り出す、クリシパスが、笑ひ死にゝ死んだ事から、バルザックがバリーをうろついた事果ては世界で一番長い字迄饒舌り散らしてゐる。

エラスコスは、よく十七ケ國の語を操つたと言ふ　然し彼は、語學者ではあるだが、藝術家ではなかつた。私の知る一老人は蠅の眼玉の大きさから、牛の耳の毛の數迄知つてゐる程のもの知りだつたが、この老人は、單にものしりと言ふだけで、學者ではなかつた。私は、夏目さんの『猫』を、膝の上に置いて頭を撫でゝやらうと時々思ふが、何時も其の時、『猫』は氣障な聲でニヤアとなく。『猫』を見る度に私は溜息させられる。氣障な鳴聲が耳について……。氣障な、と言ふと少し言葉が惡いかも知れぬが……。

其れでは、何んなに氣障なのか？と問はれると一寸私も困る、此處だ、とシツカリとつかめないだけ其れだけ始末が惡い。何處からともなくムウンと來る氣障である。

『猫』は、ほんたうは温情なのだが、たゞ私一人が氣障にとるのかも知れない。『猫』に對して氣の毒なと時には思ふが、さて何うする事も出來ない。私の前生は、若しかするとねずみだつたのかも知れぬ。

いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜國

こんな句が有つた樣に思ふが、私は氣障でもやつぱり夏目さんの『猫』だけは捨かねる。去來は

うき友にかまれて猫の空ながめ

と、言つてるが、夏目さんの『猫』は、激然の眼で私を睨んでゐるかも知れない。

『猫』の機嫌取りに、『猫さま』を詠んだ句を擧げてみやう。

猫の戀初手から鳴いて哀れ也　野坡

夏目さんの『猫』は、二絃琴の師匠の家の三毛子の事を思出すだらう。

猫の子の見つゝほつれつ胡蝶かな　其角

蟬取りばかりやつて遊んでゐた『猫』は、大きなくしやみをやるだらう。

麥飯にやつるゝ戀か猫の妻　芭蕉

獨りものゝ『猫』には、この美妙な感情の動きは解るまいて。

うらやまし思も切時猫の戀　越人

三毛子の墓にでも詣つてやるがいゝ。

あら猫のかけ出す軒や冬の月　丈草

障子を突き破つても、ニヤンとも云はぬ樣な横着な『猫』である。其のくせ自分では教養の有る『猫』の積りでゐる。

山寺や猫守り居るれはむ像　不撤

『猫』にチト坐禪でも組ましたら、もつゝいゝ『猫』になるかも知れなかつたのに。惜しい事に、噛りくさしのラテン語などを後生大事に饒舌つてゐるから、留守番一つ出來ない。たまにやるかと思へば、餅を喰つて『猫』踊なんかやる。

猫の戀やむ時閨の月おぼろ　芭蕉

三毛子の墓の前で、ギリシヤ語で鳴いてみたからう。

かくれ家や猫にもすへる二日灸　一茶

灸ではまだ〳〵利目が無い。『猫』には三十棒を喰はす必要がある。灸位ぢや、ニヤンとも思はないだらう。

猫の子や秤にかゝりつゝじやれる　一茶

猫は、じやれるかはりに、秤にのつかつたまゝ、ゆう然と秤沿革史でも饒舌るだらうて、何處迄も可愛いくない『猫』だ。

大猫の尻尾でなぶる小蝶かな　一茶

『猫』は、あの一枚の舌で幾千、幾萬の人々を散々なぶつてゐる。これから後も、どれだけ多くの人をなぶるのかと思ふと、たゞ〳〵空恐ろしくなるばかりだ。

果に角、『猫』は夏目さんのくわい心の作である。夏目さんを有名にした『猫』にからかふのは、チト間違つた事かも知れぬこの位で止めて置く。

題の出ぬ句會

椙元紋太

僕がふつと目を覺ましますと其所は早や句會の會場だつたのです。何時の間に來てゐたのか不思議でしたが、それよりも不思議はこの會場の廣いことです。試みに僕は東方へ十里行つて見ましたがまだ向ふがありさうなので引返して元の所から西方へ十里、北方へ、南方へ、上へ、下へ、その間、間へ各々十里宛行きましたが迚も際涯がありませぬ。到頭元の席に戻つて瞑目したまゝ凝乎と默想を行つて見ますと十里の向ふにまだ十里があり、その又向ふに十里があり各八方にいくら行つてもその向ふがあることがこの心に反映して考へられるのでありました眼を開き心を落つけて靜かに見廻して見ると不思議はそれのみに止まりませぬ。この句會には幹事がゐない。題が出てゐない頂戴ツと聲をかけて吳れる人がゐない。一體どれを句にして、誰れに示して、誰れが可否を定めて吳れるのだらう。暫時、呆氣に取られて茫然として居りましたが、待つても待つても、誰も句を作れども、此の題に據れども、それに締切が何時だか、そんな事を定める者もゐないらしい。題を出して下さい題が無くては作れませんよ。締切がないなんかあんまり馬鹿にしてゐる。幹事、々々、幹事は居ませんかと怒鳴つて見ましたがその聲は何んと情ない張合ひの無いことでせう。つう〳〵と向ふへ消へて行つてちつとも手堪たへがないのです。あまりの馬鹿らしさに、自暴氣味で仕方が無い、句を作らう、雜吟でもやらうと思つて始めかゝるとこれは可怪しい。題が無いこともない。其邊にあるものが自然に題だとも云へる。幹事が無いから題も出ないが併し題が無いとも云へない。それを當座の題にして自分勝手に、自分の好きな思ふまゝの句を作つてやらうと漸く心が落ついて來ました。處が作るのはよいが、作るのは自分勝手にやれるが扨て出來た句は何うしたものでせう。待つても出て來ぬ幹事を當てにも出來ません。誰が見て吳れるのだらう。もう誰にもいて貰はなくてもよい。見たい人に見せてやる。見たくないものは勝手にしろ、結果は恁うなるのだらうが然し今分の僕はまだ見て貰ひたい氣があり、それでなくては永劫に見て吳れる人の出ない氣がするから頂戴のないこの句會が心細くなつて來たのです。

茲で僕は從來の僕等の句會に馴れて來たことが今非常に邪魔になつてゐることに氣付きました。從來の句會だと、そこに幹事が居て萬事を斡旋して吳れます。題が出てゐるから取つかゝりが早い。〆切がもう十分しかありません。はいもう五分ですとやられるから、ジャッキにかけられた豆汁の樣にぽさり〳〵

と句が出て來ます。はい締切です　三十分ばかりすると選句の發表がある。又は披講互選で頂戴々々と景氣よく〻かねる。自分の句の可否がすぐ判つて吳れるから誠に氣が輕い。愉快さがある。暢氣さがある　その締られて乾いた豆粕は次の句會までに取替へて置けばよい。またぼつり〳〵と出る樣に。何んと氣樂なものではなからうか。處がこの今來てゐる廣々とした大句會は、その氣樂さが邪魔をして、從來の句會の樣な氣樂さを待つ心が邪魔をして中々句が出來ない。何から何まで自分の力で運ばねばならない。凝乎と待つて居れば何時まで經つても題も出なければ締切も來ない。只だ無爲に過ごす慘めな自分があるばかりだ　愚圖々々してゐるうちに、この句會の中で僕はまた草臥れたまゝ寢て終はなければならない。締切のない句會だから僕が嵌込んだつて起して吳れるものはあるまい。起きてゐる間に句を作らう。早て吳れる人の有無は今は問題ではない。一たん出席した句會で句も作らないで引下ることは僕としては出來ない。恁う考へますと僕はぼち〳〵作句にかゝり始めたのです。處が今ゝの豆汁の辭がありますから中々苦しいのです。だから內密で從來の句會の仕組を少うし利用してゐます。まづ其邊にあるものを。だと考へて句を作るのです。それが若し全然從來通りだと判つてはこの大句會では通用しないのです。その點に難かしいものがあるのです。從來の句會の方法はこの大句會に免されてゐません。中々許す處かそんなものは句ではないと言はれるでせう。其邊にあるものを題にすると云つたところでどれも之れも動いてゐますから少しも纏まりがつかない。強いて一題を捕へますとうつかりすると直ぐ從前通りの方法に全然なりきつてゐるのでこの大句會に通用しません。從前の句會だと紙に書かれた動かぬ題を見詰めて句を作つて居ればよかつたのですが大句會では皆題にすべきものが活動をして一所に停つてゐない。それに從つて此方も活動をやめないで、即ち蒲團に坐つて頭を抱へて眼を閉つてゐないで、ぢし〳〵動き乍ら瞬間に句を作らなくてはならぬから中々僕等凡物には容易な業ではない。稀れに出來たとしても見て吳れる人がゐないから自分でそれをしなくてはならない。自分で見てゆくと此奴贋物か疑ひ物か判り過ぎるほどよく判るので、さあさうなると嚴重にやればやるほど發奮する句がなくなり、自分に早せる句も無くなるのです。そこに種々な妥協が行はれたり算段をやるやうになるのですが、われにも免せ白河の關で暫らくは過度期でございと自分から眼を閉つてかゝる始末です。自分の力が足りないばかりに此麼苦しい思ひをするのです。それといふのが前に言つた從來の句會に中毒してゐるからだと思つてゐます。一たん中毒したからはその治療は困難です。致し方なくば句會と題詠のコカイン注射で生きねば仕方がありません。從來の句會に馴

らされた僕としては悲しい哉已むを得ないのです。それでも生きてゐることに違ひないのだからそれで宜いでせう。たゞ健全でない生存だと云へるでせう。同じ生きるなら健全な生活を營みたいものです。

大分くどくどと言ひ列べましたがこれでやめます。兎に角、出席した以上は一句でも自信を持て作らうと思つて焦つてゐます。この緊りも無く、ぼんやりしてゐては一句も出來つこの無い大句會には實に澁渋とした生甲斐のあるものがあるのです。それはこの句會に出席して初めて判つたのです。題の出ぬ、締切のない句會、此所で一つ奮發をしなくてはなりません。何れこの大句會の容子が具體的に呑込めて來たらその時又發表したいと思つてゐます。何しろ今では出席したばかりで、只だ漫然と、茲にこそ僕のユートピアを發見しさうな心持がしてゐるだけですから。（終）

川柳家の危機

―作句第二期踏破―

庄萬よし

有縁の柳人川柳の野邊に始めて遊ぶと、見聞、體驗、所感皆材料となつて作句の衝動を喚び起し生れ變つた人間味の喜びで多作、亂作の三昧に醉ふのは初戀を得た處女の心理にも比ぶべきものであらう。

最初の一年は五里夢中に通過し、次ぎの一年は前途ある作家なぞと嘱望せられ、次ぎの一年には中堅作家を氣取り、銘吟だなぞと折紙を付けられる句も出來る頃から、作句の第二期として倦怠の氣分が頭を上げかける。自分の句に物足らなさを感じる。同輩の熱心な作品が駄作に見へる、先輩の銘吟にも初心の時分に得た感興も起らなくなる、所謂作句第二期の踏期に到達したのである。

この頃には句會へ努めて出ても、以前の樣に作句衝動も起らないし、扨ける句も減つて來る、選句にも不平が出來て來る、柳友からも『君は近頃句が拙くなつたネ』なぞと浴せ掛られると『川柳なんか男子の畢生の努力に價する仕事でない、如かず詩を作るより田を作れさ』なぞと捨白科の一つも言ひたくなつて來る。

この時分に自分の印刷になつた句は普通二三千句であらう、選者に褒められた句も自信のあつた句も、案外幼稚なもの燃焼が不足なものだつたことに氣が付いて來ると、數年の努力が後世に殘し得るは果して何句あるだらうかと情ない自問自答に墮る、柳界を飛び出すもの十中半はこの危期であつて、一時寢食を忘れた熱心な作家ほど柳界を去る危險率が多いやうである。私の柳友にもこの危期に彷徨してるものも、斯して柳界を逃げ出したゝのも四五人には止まらない　併しこの瀬を乘り切らねば一家をなすことが出來ないのが總ての藝術についての眞理であるとすれば、苦しくつても、邪が非でも一と工夫せねばならぬ關所である

人の行き方は十人十色であるが私の今考へてゐる進路は大略次の樣なものである。

一、絶對に古人や先輩の句の模倣をやつてはいけない、この期に及んで模倣は伸びんとする樹木へ日光の遮斷である。

二、自分の句を自分で點檢をし、先輩の隔意のない批判を求めて自分の特長を自覺することである、特長の自覺なき作句は鉢の中を泳いでる金魚で何處へも着く時はない。

三、前項の手段で自分の缺點をも自覺することである、纖細な作家は雄大を雄大な作家は纖細を學ぶことは亦一家を成すものゝ必須要項である、仁王尊の眼にも涙があることを知らねばならぬ。

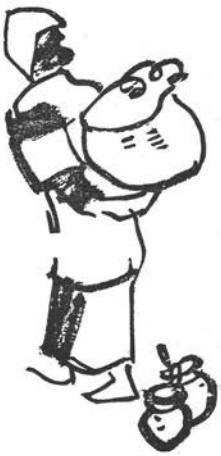
四、川柳の持つ律動は纖細にも雄大にも諷刺にも滑稽にも主觀にも客觀にも適確と鮮明とのメスを用ひねばならぬこのメスを研ぐにはよく見ることである、よく聞くことであるよく感ずることである。

五、この期を踏破するには現代の律動に乘らねばならない。名句を生むは完成せられたる個性であると同時に抽象されたる時代相である。最早や萬葉時代や芭蕉時代や柳樽時代のテンポとラジオ飛行器時代のテンポと、合奏することは出來ない、昭和句は昭和のテンポによつて表現せなければ創作の價値はない。

六、お經を暗記してるのが名僧でない如く、醫書に精通してるのが名醫でない如く、柳書だけに賴つては川柳で一家をなすには不足である。川柳で一家をなすには人間の殊に日本人の心情の動き方を研究せねばならない。それには俳句和歌、小說、繪畫、演藝、最近では映畫の傑作は一と通り心得て置く必要がある。

× × × ×

以上六項聊六ケしいやうであるが、これしきの覺悟もないやうでは畢竟緣なき衆生、元の木阿彌で葬られるより外に道もあるまい。



川柳塔

○　酒井駒人

今宿へ着いて風呂場の月を見る
だます氣になれずそのまま醉ってゐる

○　松盛琴人

母病んでゐても女給の唱つてゐる
髪を梳く二の腕白く動いてゐる
虫をころしてゐれば馬鹿にし
体裁を言へと正直叱られる

○　横田眠聲

法の裏とかを金持聞いてゐる
美くしい年に聞へる十八九
烏かあ〳〵香奠をつゝむ
圓滿なくらし利が利をうむはなし
一票へ元大臣が頭さげ
病身のきつい理屈もよう云はず

○　西本三笑

考へりや兩手の重さ違ふてる
ごちらでもよい盃へ手が伸びる
計畫へ妻の茶漬の音高し

○　岩崎柳路

家政婦に叱られて居るいゝ亭主
膝枕いつそ別れやうかと思ひ
當直へ新妻電話掛けて來る

○　庄萬よし

甲子園所見（五句）

捕球したを頂いてから外野投げ

滿壘に餘裕を保つ靴をしめ

盜壘は許さぬと捕手見得を切り

外野手が折重なつて本壘打

一身に拍手を集め四番立ち

○　橋本二柳子

柳陽氏嚴父を悼む（二句）

父の死に絶壁からおちんとす

我を探しに來た父の夢を見る

◇　松丘町二

子を差上げて衰へを知る

波紋一つ起らず池に蚊が溺れ

女すぐ死ぬと言ひ出すおそろしさ

鏡臺の裏に畫の蚊屯して

けだものゝ匂ひうれしく牛を撫で

◇　石川双葉子

保險屋は店の方から手なづける

算盤づくめの兄となりけり

外務でも辛棒します大學出

◇　水谷鮎美

浴衣一反この夏の汗を吸へ

戀のひま南京蟲に嚙れて居

おかしさは瓦におさへられて生き

入壘に肩ながさせる主人の息

獨り者脊中の垢は知つてゐる

心配はよせよと叩く大きな手

命日に疲れながらも孝の端

◇　島田翠峯

灸饐へに行く道すがら虹が出て

友達にあいつと云はれ貯めてゐる

芋畑すかせば西瓜成つてゐる

孝行の子供あんまりみすぼらし

神樣にすがりし母の眼がつぶれ

逢ふて來てもうおしまひの五圓札

◇　中澤濁水

婦人科醫次々青い顔を呼び

見てゐるとわざと魚釣り釣らぬやう
ミシン臺工夫と別な足を踏み
刀と琴こゝな夫婦の趣味が見え
鋏さへ入れれば車掌振り向かず

◇　兼重白鷗

故郷の友土堀つて居てごうする氣
許嫁傘を戻しに行く用事
ハンカチを首に捲いてる啞の戀

◇　朝田新水

兄の家他人の樣に使はれる
借金に明日は此の地を離れんか
惚れられて惚れないことにきめておく
洗ひ髪わけを話して母が出る
二階へも團扇一本もらつとき

◇　中見光路

魚釣りは見てる方から話かけ
箸ばこをふと頂いたその淋しさ
脊の壁けふの疲れを知つてくれ
稱名の心からなる節がつき

◇　安西杏三

受合つた醫者が歸れば死んでゐる
夏痩にしても餘りな膝頭
念佛いへとむごい宣告
僞善者が澤山居るとうそぶきぬ
丸髷で來て病人をきたながり
卒業を待たずに死んだ姉の本

◇　越村加香

喜びの普請こゝが出來あこが出來
口下手と夫婦になつて世をせまく

思出（二句）

のり付の浴衣の好きな父でした

◇　楊井二南

夏の宵戀の袂になつてゐる
受取れば郵便局に用はなし
銀行で他の思案は思ひきり
得意然たる小學校の先生よ
あることないこと女の恐ろしさ

◇　中島鐵洲

熊の檻曳いて熊の胃賣りに來る

忍従の殻を破つた蟬の聲
一つ身の紐にも見せた母性愛

長谷川一徹

◇

儲かるかとは君誰に云ふ
番臺に死んだおやぢのまゝが居り
洋裝の旱の街をまつしぐら
シネコダツク夫人やさしく母となり

桑原京郎

◇

御本尊そつと覗けば剝けてをり
あの頃は不孝だつたと箸を摑き
嘘をしたのに雀うろたへて
空想だつた偶像を眞ッ二つ
ちか道をする氣の露次が拔けられず

中野柳陽

◇

嬉々として泡は池底をまろび出で
受領證みじめに人を嘲笑ひ

檜山千代二

◇

看護婦がしみ〴〵と讀む月おくれ
魚釣の場所へ夏の月が冴え

粒々集

東京　富士野鞍馬

特急を沼津へ降りる家族連れ
人間が猿にも見にて鐵工所
不平二人が今日も早退き
十割を夢見て發起人並び
下地ッ子同じ事に聲が嗄れ
机に向ふと裏の鈴虫が鳴き
御詠歌の上手になるは哀れ也
ママサンミ云はしてだらしない女

御影　長崎柳秀

看護婦のひく琴の音は哀れなり
女房になつて女の愚痴を出し
兒のたちがいゝの惡いに夜が更け
おかしさを女給は肩の搖れに見せ
討死の型で寢てゐる普請小屋
海水着うれしい人に撮されゐる
對浴衣そこらあたりを歩きましよ
借りる氣へ膝をくずせのまあ飲めの

月評（前號）

紋太　山雨樓　素人
多聞　町二

近作柳樽　紋太提出

家主が違ふ屋根の高低く

聞路

紋太―聞路君の五句のうちで、この句が目にとまりました。何んとなしに可笑しみが含まれてあると思ふ。高みから家々の屋根の形を見下して、その形の變化に夫々違つた家主があると言ふ樣な事を思つたりして、それから引いて世帶の色々な變化を思はせるのが、この句のいゝ所だと思ふ。たゞ見つけ所の奇矯さが少し露はに出過ぎては居ないかと思ふ。けれども……

素人―私も面白い見つけ所と思ふ。その人は高みから屋根を見たと言ふより、もつと內容的に何か言はうとしてゐるのではないかと思ふ。即ち家主の性格を表はさうとしたのではなからうかと。それならば少し失敗だ。然し寫生だけの句として了ふのは惜しいと思ふ山雨樓―僕はこの句は理智が勝つてる樣に思ふ。

多聞―屋根の高低く、と言ふことが寫生的に先に氣がついてをりながら、直ぐ後から家主が違ふと言ふ理智が口を衝いて出た事は作者が作句中にある一轉機が、その刹那にあつたのではないかと思ふ。と同時に紋太氏の說の如く、家主の性格とか何んかと言つたものを多分に詠まうとして居ることが覗はれる。寫生句として此の句を見ると、芝居のバックかお伽噺の家でも見る樣な感じを持つけれども、それだけのことにこの句を見てしまふのは、作者の意思に添はないかと思ふ。

町二―私は「屋根の高低く」と言ふことから夫々の生活の相違を言つて居るのぢやないかと思ふ。併しそれなら家賃が違ふとあるべきだと思ふ。然し私は家主が違ふと言ふことでさう言ふ所を思はせた主觀的の句だと思ふ。私はこの句は佳句と思ふ。

山雨樓―どうも僕は理智的な句だと思ふ。家主が違ふと言ふとこに、ある概念が入つて居るし「屋根の高低く」と言ふ對照を主眼に置いた事は矢張り、その見つけ所の面白さに引きずられた樣なかたちがあると思ふ。紋太さんのお說の樣な色々な生活相が この句から覗はれるかも知れないが、句主としてはそこまでの深い着想でなく、唯さういつた面白さに句をょとめたと言ふ樣な感じがある樣に思ふ。どうもこの句の出發點が理智にあるやうでも一つ佳句とは思はない。

紋太―無論理智的な興味を以て詠まれた句だと思ふが、そこに又私が惹きつけられて共鳴した譯である

光耀拂　素人提出

嬉しさの鏡にこぼれ髮をすく

吟女

素人―一寸陳い樣な句ひのする句だと思ふが、壁のやうな玲瓏とした句で、嬉しさがそこに見える樣な氣がする、かう言つた句のうちで成功の句と思ふ。女性特殊の觀方から眺まれた句であるといふことを割引した所で、佳句だらうと思ふ。此句に感心するのは私の思想がローマンチックな爲かも知れないが、尤も外出前の時だらうと思ふ、結婚前かも知れないが、さうとは思へぬ……言ふまでもなく娘さんです。

山雨樓―素人さんのお説の樣な氣持は受けされぬ事はないが、別に之を言ふ張り切つた感情も表はされて居ないやうに思ふ。その嬉しさなるものがどういふ所にあるかと言ふ察しがつかないだけに、作者の思つた程に感じが與へられないやうに思ふ。併し一面女性の鏡に對する愛着は、女性ならでは味はゝれない氣持があるかとも思ふ、なだらかな句調に對して或る魅惑を感じないわけには行かないが、兎に角句主の感情が十分に表現されて居ない憾みがあると思ふ。

多聞―私はこの句が、餘りに表現に於いて成功して居る爲に內容が勢ひたじろぐ風な感じを持たれるのではないか、嬉しさといふ事を言はずして、尙より以上の嬉しさの氣分を表はす事を學びたいと我々は何時も考へて居るのである。それと同時に「鏡にこぼれ」と言ふことが讀むものをして、どきんとさせるものがある、その後から又「髮をすく」と輕く言ひ拔けて居る點などが、この句が表現に光つて居ると言ふ事を我々に思はせます、その嬉しさがどこにあるかと言ふ內容に就いては山雨樓氏と同意見である。

町二―女が鏡に向つて髮をすくと言ふだけの取材が平凡だと思ふ、別に特殊な句でもなく「鏡にこぼれ」と言ふ表現もさう特殊なものではない、只普通の句としか私には受けられない。

紋太―風白いとか可笑しいとか言ふ句では無論ないと思ふ。嬉しさが事件的に何であつても構はない。素人氏の言はれた通りに私も感じます。兎に角女性の若々しい氣持の良い感じが十分に汲みとる事が出來る。陳いと言ふのは或は短歌のやうな取材であると言ふ意味で、陳いと言へるかも知れぬが、それに鏡に向つて髮をすくと言ふだけの只それ丈でしたら平凡だと言はれるかも知れぬが、この句の樣に氣持のいゝ感じが盛られるならば、大いにかうした平凡な材料を縱橫に使つて欲しいと思ふ。私はかう言つた川柳が益々多く出ることを望むで居る。

素人―この句を戀の句に見たくない、すぐ戀を聯想する句ですが……。

紋太―少女の嬉しさですな、二十から上ではないと思ふ、さうでないと年のいつた人がこの純眞さを出し得ないと思ふ、嬉しさが何んであつても構はない、作者の心が讀む者に響いて共に踊り出したい氣にさへなる。

山雨樓―併し嬉しさが問題だと思ふ。嬉しさの說明が出來て居ない。

紋太―さうですな、然し兎に角嬉しさだけはよく受取れる樣に思ふ。

山雨樓―矢張り主觀の句ですね。

素人―さうです。主觀の句だと思ふ。だから嬉しさの內容の說明が無くても、それが感じられさへすればよいと思ふ。

多聞―川柳でも俳句でもさう言ふ已むを得ない場合は充分あると思ふ。

山雨樓―主觀の句として少女が自分で髮をすいてゐるのか、人にすいてもらつてるのかわからない、髮をすく樂しみを客觀的に見た句としては何だか……。

紋太―人に髮を梳かれてゐるのではなく、自分ですいてゐるのです

素人―外出前のやうに、何處かに連れて行つて貰へるといふ嬉しさを咏んでゐるのだと思ふ。

川柳塔　山雨樓提出

ふみしめて歩く愚鈍な戀をする

鮎　美

山雨樓―よく歌つてゐると思ふ。戀と言つた樣な熱情的な言葉に對して、かういつた回想的な感じを表はす事は、一見不自然な餘りこう冷やかなやうな感じもするけれど「ふみしめて歩く」と言ふ言葉によつて、その戀に對して思ひ切つた勇敢さを出し得なかつた淋し味又「愚鈍な戀」と言つて、自ら自分の態度を罵しつた樣な氣持は誰にでも有勝ちな戀をする者の心境だらうと思ふ下五の「戀をする」といひ切つた所に叙法として物足らなさを感じるが戀に有勝ちな、心境をぢつと見詰めて或る程度まで活かして居ると思ふ。

町二―愚鈍な愚と言ふのは、結局眞實の戀である、「ふみしめてあるく戀をする」と言ふのである、主人公は反つてそれを誇りにして居る氣持を受取る、世間の奴等は浮はついた戀を享樂して居るが、自分だけは本當の戀をしてゐるのだぞと言ふ自負心を抱いてゐるやうに思はれて、自嘲的な氣持は少くない樣に思ふ

素人―愚鈍な戀と言ふのは、町二氏の說の如く、眞實な戀、トリックのない戀だと思ふ「愚鈍な戀をする」と言ふ言葉には少からず自嘲

がある、むしろ誇つてる感じはなく止むを得ない自分の愚鈍さを嘆いてゐるが、それを自分にはどうする事も出來ないといつた心境を眺んだものだと思ふ。この句は佳い句だと思ふし、常から鮎美君の句には敬服して居る鮎美氏の戀に對する態度が詩人であり、畫家であつた村山槐多の態度に似て居る所があると思ふ。「槐多が歌へる」の中で槐多が淺草のお玉に對する眞劍な戀、そして自分にはどうする事も出來ない、言つた風の戀をうたつたものがあるが、その心境と似て居るやうに思ふ。

叙法としては山雨樓氏の言はれた如く、終ひのおさまりが少し輕過ぎると思ふ。

町二―「ふみしめて歩く」と言ふので進みつゝある戀を表現して居るので「愚鈍な戀」は一歩一歩本當に戀を進ませつゝあるので、自嘲的な意味は薄いやうに思ふ。

素人―「ふみしめて歩く」で言ふのは戀をふみしめて歩くのでなく、戀に對する眞面目さの形容だと思ふ。戀を一歩一歩堅實にふんでふみしめて行つたのではない。無論この戀は失敗だらうと思ふ。

紋太―「ふみしめて歩く」と言ふのはつまり用心深いとか、躊躇するとかいふ意味で、つまり愚鈍な事の説明であらうと思ふ。だからふみしめて歩くと言ふことと、愚鈍な戀とが重複に見ゆて、叙法に遺憾がある樣に思ふ。つまり勇敢を要する戀に、盲目的に進まねばならぬ戀に、徒らに躊躇逡巡して居る自分の戀を嗤つてゐる樣に僕はとります。

多聞―紋太氏と同一意見です。

川柳塔　多聞提出

計劃はいゝが馬力が續くかい

萬よし

多聞―今までに俎上にのせられた句は、句の内容を探究するものばかりでしたが、この句は萬よし張りと言つた樣な、それもその萬よし氏の身体の恰好つきを表はした樣な句であつて、無論一見してどんな事を言つて居るかを諒解することが出來る。私の皆樣に聞きたい所はかう言ふ樣な句と、川柳と言ふものについて、この句を中心とした川柳の行き方に就いて、皆樣の御意見を聞きたいのです。

紋太―最近の川柳界としては、かう言ふ句は歡迎されないやうに思ふ。何故かと言ふとつまり受ける感じが、あまり簡單すぎるからだと思ふ。只句の聞くとか讀むとかした時は、一寸面白いと言ふ程度で、フンと言つてそれで通過する面白味しか持つて居ないので、歡迎されないのだらうと思ふ。けれどもこの句体が惡いとは思はないし、この進み方が惡いとは思つてゐない。この行き方で同じフンと笑ふにしても、腹の底から笑はせればよいわけで、そこに深く肯かせるものがあれば差支へないと思ふ。この句もかう言つた言葉を使ふ場合に私達も出會ふやうに思ふから、うなづく事は出來ます、けれど深くうなづく所までは、この句は成功して居ないと思ふ。

山雨樓―つまり表現は各自の技能のある事で、その主觀さへしつかりとした鋭い深いものがあれば、人々に共鳴させる事が出來ると思ふ、如何に表現するかと言ふ事と、如何に感ずると言ふ事との調和が、藝術としての難しい點であり、奥のある所だと思ふ。一見して單純な面白味だと通過しさうな句であるが（自分も一見して通過した句であるが）問題視されて見ると、相當に表現上に効果を表はした句と見る。殊に多聞氏の言はれた如く萬よし張りと言つた樣な、萬よし氏その人の個性を表はし得て一層感じを引きたゝせて居る樣に思ふ。想としてはあまり深みもなく多少どちらかと言へば、冗談半分に言つた樣な場面をすら想像出來るのであるが、表現上に於いて新しい試みだと思ふ。

素人―一寸見ると會話の斷片のやうな句であるが、かなり表現に苦心した句と思ふ。僕が計劃ばかり立てゝ實行をせぬので、僕に言はれた句かとも思つてゐる。かういつた形式の句で面白味を盛つた句が出てもよいと思ふ。近頃の句は内容に重きを置きすぎて第三者から見て分りにくい句が段々多くなつた樣に思ふ。別に素人分りのする句を作れといふのではないが、川柳をやらない人の中にも川柳の好きな人もある、こういふ人から川柳が昔程の面白味が無くなつて來て、樂屋落見たいな句ばかり多くなつて來たといふ非難を聞いたことがある、藝術は自分だけに分ればそれでよく、第三者がわかるわからぬは問

題外だと云へばそれまでだが、誰にでも分り易い句をもつと澁山作つても、川柳の墮落ではないと思ふ。この句が非常にいゝと言ふ意味ではないが、こう言つた行き方で誰にもわかる輕い面白味を感ぜしめる句があつても良いと思ふ。

多聞―素人さんが自分のことを言はれてゐるのでないかと言はれてゐる事と、又句に纏めるのに苦しんでゐると言はれたが……

素人―苦しみと言ふのは、表現に骨を折つてゐるといふのです。

多聞―自分の言はんとする事が、それが心の苦しみであるといふことゝ句を纏める上に苦しむことゝは別にしなければならぬが、素人氏は句に纏める表現法の苦しみを、萬よし氏は味はつて居られると仰つてゐるが、此句は苦しみといふ程度でもない、一寸した會話の斷片をあつさりと出したのではないかと思ふ。川柳の藝術としては山雨樓氏の説の如く如何に詩として表現し、詩として感するかその「詩として」と言ふ所を通り越されば不可ぬのではないかと思ふ。この句はその關所破りをし居る樣に思ふ。腹から笑はせれば力があると言ふ紋太氏の説は、ご尤もですがその内容を生地のまゝで出して終へば餘り露はすぎて、格言のやうになつて來はしまいかかう言ふ傾向は餘程注意せねばならぬと思ふ。

素人―この句は詩的價値は餘りないと思ふ、詩はほんとは何を言つてるのか、わからぬ音樂的の如くになつて行くものと思ふ。わかればわかる程詩から遠ざかつて行くのである。

多聞―斷片的だと言はれるのもそこですね

（亂取茶郎記）

（四十頁より續く）

□君はかつて川柳雜誌上に路郎が「半文錢の熟讀を望む」と傍書した一文を書いて君に苦言と教示を與へたので「路郎君に答ふ」といふ一文を送つてあるが、何の理由か知らぬが發表されない「と御憤慨のやうであるが、あれは君に對する友情として見合せた方がよいと信じて發表しない、その他番傘の惡口を書かれた原稿も來てゐるが、藝術的價値の稀薄なものと思ふからその儘にしてある。川柳雜誌では君の原稿は從來頂戴して掲載して來たが、藝術的價値の上から見てどうかと思ふものは成るべく掲載を見合せてゐるのである。君が若し影像のやうに六頁も一人で占領出來る雜誌があるからその方へ發表すると仰せになるのであれば何時でも原稿は御返し申上げる。

□人生問題、社會問題、藝術味の豐かな句に進みたい爲めに君達は努力されてゐるとのこと誠に結構なことで、柳界の爲めに慶賀に堪へない次第である。どうかこれからは川柳雜誌の句會にもせいぜい御出席下さつて、我々の爲に御啓蒙の勞を賜はらん事を希望します、此前の六厘坊忌の時の如きは柳界の大家半文錢先生を御存じ申上げてゐたのは路郎先生と二柳子、萬よしの兩君と僕ぐらいのもので約七八十人の人が君を知らなかつたのは實に君に對して遺憾此上も無いことである。お互に進むべき道が同じであり、殊に君は川柳雜誌の客員であるのだから口先だけで努力してゐるなどと言はずに、も少し實行をそれに伴はされたら如何です。他人に苦言を呈する暇があつたら御自分の句をよくするために精進されたら如何です、こんなおせつかいに努力をされる事が決して君の句の内容を充實させる道ではないでせう。

□前にはドフトエフスキーの罪と罰の一節を差上げましたところが、御氣に召さないと見へて御返却になりましたので、露西亞料理はお口に合はないと心得まして、今度は佛蘭西料理を差上げます、どうか御召上りを願ひますコツクの名はロマン・ローラン料理の名は佛蘭西語でLES LOUP、日本語に譯しますと狼と申します、こんなことは和蘭語まで御存じの半文錢君は先刻御承知のことゝ存じます。

「奴等はいつもお高くとまつてゐやがる。だが僕等がゐなかつたら、奴等に一体何が出來るか御手並が拜見したいや、トウヤヱ（人の名）に任して置くのは、火が燃へ上がる迄待つてゐて始めて「火事」だと喚き出すやうなものだ、（中畧）奴等は實際の事は何一つ知りやしない、紙を眞黑にしたり、思想をでつち上げるにはこんな人間も必要だらう。だが大掃除をやらうて時、そんな人間ばかりだつたら、國民は塵芥の中に朽ちてしまふ」

唐柳短解

蛭子省二

（九二）曉は丘隅にかえる夜の鷹

「繒靈寅鳥、止于丘隅、子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎」（大學）夜の鷹は夜鷹の事。

（九三）粟散邊土とあなごり風をくひ

粟散らす國でも罌粟の手に合はず

元寇の句であろうと思ふ。楞嚴經會解『粟散即小國小主散天下如粟多也』倭訓栞『日本を東方粟散國とするは、元早釋書日羅が語に見ゆ、佛氏の私說なり、百國に足らざる島とし、二百以下を粟散國とすといへり、仁王經に『中下品善粟散王天臺疏口小王衆多猶粟散』邊土は片田舍の事。罌粟は支那である。

粟ちらす國にうゐたる民はなし

町人囊底拂卷ト『日本國をもつて佛者は粟散國と云、儒者は中國より開基せし屬國なりとおもへり、今此世界大地の外ならばしらず、此大地世界といふは實に測量の考驗ありて、其周大日本の萬五千里にして甚だ曠蕩の說にあらず、其內島洲多しといへ共、日本の如くなるもの八あり、そのうち日本を第一とす、しからば豈粟散國といふべけんや』云々。

もろこしのほを吹倒す粟の風

粟の近所へもろこしはよせつけず

（九四）薤露の御車ひく牛も力なし

カイロは葬を送る折に歌ふウタ卽ち挽歌であつて、薤露と蒿里と二章ある。

薤露の歌「薤上露何易晞、露晞明朝更復活、人殆一去何時歸」

蒿里の歌「蒿里誰家地、聚歛魂魄無賢愚鬼伯一何相催促、人命不得少踟躕」

（九五）天盃へ月日のうつる十二章

昔、天子の宴龍の御衣には、十二種の模樣があつた。日、月、星辰、山、龍、華蟲、宗彝、藻、火、粉米、黼、黻

（九六）折檻の節は朱雲が始めなり

折檻なる語の起りで、朱雲は身長八尺に及ぶ强勇の士、容貌又人と異なる。成帝に仕へてゐたが　佞臣安昌侯張禹を、廷に論爭し、上の怒りにふれ。死罪を賜はつた『御史寅を將ゐて下らんとす、雲殿檻を攀づ檻折る、雲呼んで曰く、臣下龍逢比干に從て地下に遊ぶを得ば足れり』（朱雲傳）と。

（九七）大病の獏は鼾もなめかねる

獏は人の夢を食ふと言はれてゐる

蚊屋の夢獏はこし粉を喰ふ心

白氏文集の獏屏賛序云。獏者象鼻犀目牛尾虎足。生南方山谷中。寢其皮辟瘟。圖其形辟邪。豫奮病頭風。每寢息常以小屏衛其首。適遇畫工、偶會寫之。

世の中を悟つてみれば獏のくそ

芝居の夢がたべたいと獏の嫁

けつぶうの獏は盧生が枕もと

聖人許りだと獏はかつに死に

大病の獏いびきさへ通りかれ

獏まじり〳〵狸の枕元

夢が浮世か浮世が夢かと云ふところが、悟つた世の中なのだろう、聖人の句は述而篇にも、子曰く、甚だし矣、吾が衰へたることや、久し矣、吾れ復た夢に周公

を見ず、とある、前記の如く貘は異樣の形をして居る、

其糞可爲兵切玉、其尿能消鐵爲水、其齒骨極堅、以刀斧却砕落火亦不能燒、人得之許充佛牙佛骨

（九八）黄金で高尾交り深からず

『金箔の附いた淺黄を高尾ふり』の類吟である。

題長安主人壁　張謂

世人結交須黄金　黄金不多交不深
縱令然諾暫相許　終是悠々行路心

と此の誌の感は現代の日本も亦然りと言はねばならぬ。句釋外ではあるが、杜甫の貧交行は有名だ。

翻手作雲覆手雨　紛々輕薄何須數
君不見管鮑貧時交　此道今人棄如土

高適も邯鄲少年行中に

君不見今人交態薄　黄金用盡還疎索

と、私のような浪人には、やはり交友が少い。

（九九）母の眼へ反哺の乳を込み

これは三十八篇雨旦の作で、同篇に其笠の句『母の眼へ娘の乳の恩がへし』がある。老母の眼のかすむだりする時に、乳をさしてあげると、治ると云ふ昔からの言ひきたりがある、今でも行はれてゐる慈烏は生れると、六十日母の恩を受ける長ずるに及むで六十日反哺する、故に孝烏とも名づけられる。哺は口中にある食物の謂はれである『腹下白き者を鴉烏と名づく。その母に反哺する者を慈烏と名づく』とある。

長異見鳩や烏をまぜていひ
烏だの鳩だのと學者子を叱り
鳳凰の中に反哺の孝もあり
花魁のお茶へ反哺のかんざまし

（一〇〇）古來稀槐の株をおんふやし

宋の王祐が庭に三槐を植ゑて、吾が子孫は必ず三公たるものがあるであらうと、即ち王文正公旦果して相となる、之れを三槐の王氏と云ふ

（一〇一）豫讓忠されども孝の身

身体髮膚受之父母、不敢毀傷孝之始也、を利用した作で『身體髮膚をそこなつて夜具は出來』などもある。豫讓の句は澤山あるけれど、佳吟はない、二三を記せば

身になする漆と酒は忠と孝
古着屋に豫讓死骸を引渡し
切つて血のたらぬ豫讓が敵討
豫讓やぼ女郎買ひでも忠は出來
主の仇せしめる氣にて豫讓のみ

豫讓は智伯の臣であつたが、趙襄子の爲め君殺さるゝに及むで、山中に入り、士爲知巳者死・我必爲報讐而死と、身に漆し炭を呑むで啞となり、變裝して今の直隷省順德府城の北の小流に架せる橋下にまちうけたりした、其の橋畔には豫讓橋と刻してある由である　襄子人を遣はして、智伯の爲めに志を捨てざるは敬服すべきと、常に寛大に扱つて居るではないか、若しつけねらうを止めずんば兵を以て圍まむと。讓曰く、前君巳寛赦臣願請君之衣而擊之焉、以致報讐之意、則雖死不恨と。三度躍つて衣を刺し伏して死す。

一路集

【募集句】

魚釣

篠原春雨選

鮎料理釣りの話がはづんで來　穂波子
釣上る聲解禁のあさまだき　休歩
めしを喰ふ間は竿を踏んでゐる　正吉
誘はれた釣根氣よい友にあき　高峰
釣れぬ先からヤレ鮒味噌だの山葵だの　北城
釣り場所を見定めてから堤を下り　恒子
魚釣に道を尋ねて叱られる　ひさし
計畫をたてゝ魚釣りやめて見る　祥光
よく釣る場所に誰やらもう來てゐる　三次
モウ歸ろ〳〵といつて釣って居る　夢一佛
魚釣の腕より道具が自慢なり　南天
釣れた魚家では左程喜ばず　柳狂
釣つて來ぬのに女房は馴れてゐる　泰平
魚釣りと魚釣役所で場所のこと　滿
妾宅の方へも一組釣道具　冠白衣
釣れない日沖を汽船の一つ行く　武
近所から見に來る程に釣って來る　陽喜亭
餌だけは人並に減る糸をたれ　梢雨
釣竿の風に動くも見逃がさず　萬年青
よく釣れる場所を教へぬ釣仲間　太路
よくかゝる釣に雜當喰外し　菊路
磯釣りの此處は情死のあつたここ　緑之助
魚籃の中時々見てはしやがんで居　夢坊
魚釣の歸ればそばが出來てをり　一笑
魚籃覗く人へその日の釣咄し　突支坊
新任の課長このかた竿が增へ　郷川
釣竿の釣を眞劍でじつと聞き　草明
釣れるかと堤の上から聞いて見る　湖山
魚釣りの叱言をよそに筏乘り　一風
休職を忘れてしまふ程に釣れ　耕民
よく釣れるとこへ上役招ぜられ　鐵洲
今日も留守この頃沙魚がよくかゝり　眠聲
競技會藝者にキスがよくかゝり　新水
釣上げるまではおつかしそうな顔　孤舟

川柳家の戸籍調べ

□　係　ひろし生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(193)　池田可宵

(一)池田正雄(二)可宵(三)旭岳(四)山口縣防府町櫻町(五)卅四年十一月十日(六)呉服商(七)本降りになつて出てゆく雨宿り(八)比左良式の尻のふくらみ(九)手に觸れて得心のゆく盲目の子(一〇)琵琶(一一)有(一二)嘘の返信(一三)大正七年

(194)　森田笑太郎

(一)森田正太郎(二)笑太郎(三)草衣(四)出雲國今市町本町(五)明治四三年一月十三日(六)寫本(七)目もたゝみはさみも伏せてもこの蟹、町二(八)桃割に丸帽襟の廣い着物をきた女(九)製造中シモ五が困ナン(一〇)洋畫、文藝、映畫、食物(一一)

良く釣れる方へ魚釣氣を取られ　丸葉
何度で釣のなはつたと車掌問ひ　豚二郎
魚釣へ一天俄かにかき曇り　幸泉
魚釣の一杯機嫌で戻つて來　將軍星
鮎の住む水の早さへ踊る浮標　與詩夫
銀煙管歯型をつけて竿を上げ　かい痴
魚釣の横にしやがんだ暇人　月下
肥舟が通つたあとに一つ釣れ　鮎美
魚釣りの趣味が課長と合ふのだ　觀月
船幽の品で船頭釣場きめ　花蝶
魚釣の又餌を替へ〳〵　柳秀
梅雨晴れの川面に釣りの人映り　風柳坊
釣竿に凝つた當座は無事なりし　一杉
釣やめて川の流をぢつと見る　青柳子
釣竿の少し先を鯉が跳ね　漫洒樓
魚籠持つたが擲むのがおつかなく　眞柳
隣りたゞ何で釣れるか今日は不漁　吉朗
魚釣の又もきせるのやにを吸ひ　虚白

唇

私は朝鮮新聞、大連新聞、外數種の新聞雜誌の柳壇を擔任してゐるが、今月の「川柳雜誌」の募集句程句數に於て、投句に於て多數なのは近來に珍らしい。而かも題が人間表情の唯一の道具である唇といふので、集句の着想が多種多樣に亘つてゐて、選をしつゝ頗る興味を覺えた。それで今回は着想なり題材なりで分類して選んで見た。從つて入選句も比較的多く、爲に或は雜誌當局の方では御迷惑かとも思つたが、一面「川柳雜誌」の勢力の反映でもあり、又作者の努力を重んずる點からも私のこの寛選を悦こんで貰はねばならぬ。

琴人
冷笑
寂郎
同
内
志郎
同
鐵庵
同
露斗
同

面當のやうに隣はよく釣れる
釣れ出した灯のついてからと云ひ
癒らないのかと釣りにもてあい來る
沙魚釣に天氣のよさの皮がむけ
蛸釣りへ汽船の波がたまに來る
釣舟で舞當開く手を洗ひ
釣糸のたわみに夏の影が搖れ
釣り上げた時を語つて箸を入れ
魚釣りがよいと醫者からすゝられ
魚釣の鼻にかゝつたのは呉れず
魚釣に男の意地を見せに來る
釣れぬ日の竿へ蜻蛉が來て止り
釣れぬ浮標波に搖れてゐる斗り

佳句

魚釣のふと褌しを固く締め　雨月
誘はれたのは釣らないで解ふたる　泰平
叔母さんへ廻り道する程に釣れ　青水

ありません一人も(一二)ブル振る者、洋髪、昆虫類、たかぶるやつ(一三)松陽新報柳壇にタツタ一句

(195)　上村三波子

(一)上村來一(二)三波子(三)なし(四)金澤市横安江町二ノ二(五)明治四拾參年拾壹月廿八日(六)雜貨商　七)いつそもう我から前科者となり不二網(八)純日本風の女(九)年末熟此の上は御佛樣へ縋るなり(一〇)玉突、讀書、和歌等々(一一)有り(一二)餘りに澤山中にも耳隱(一三)大正拾五年春四月

(196)　平澤柚蘭坊

(一)平澤遜(二)柚蘭坊　三)ゆずらん(四)丸龜市外土器　五〇五(五)明治三十八年二月五日(六)丸龜信用組合職員(七)「釣れますかなぞと文王側へ寄り」路郎氏の句陣及び評がたまらなく好きです　八)日本髪も束髪も似合ひすんなり伸びた川柳でも行けさうな物分りのする女(九)苦笑ひまだ惡人になり切れず(一〇)仕事沒頭(一一)無(一二)生魚と頭の古い奴　一三)中學四五年の頃だから大正十三年頃とおぼえます。

(197)　小路京二

(一)小路末一(二)京二(三)ナシ(四)東區

唇と意思の動き

言ひきつたその唇の尋常さ　鮎美
唇に決意の色を見せてゐる　英賀夫
低氣壓少し唇尖らせて　城月
唇の燥き勘定書の朝　林
唇に意思の強さを見せてゐる　紈扇
唇に強き自信を持つてゐる　二南
そうだとも言へず唇歪めたり　道一
(佳)まだ吐る氣の唇は動いてる　三次
(佳)唇に恐怖の色が溶けてくる　菱明
(佳)言返へす唇少し震ふてる　穂波子
昂奮と憤怒が次第に冷靜になつてくる刹那の情景、唇の動きによる意思の閃きがありありと現はれてゐる。

唇と不滿

薄情へぢつと唇かみしめる　伴内
言切つたその唇をさびしがり　新水
憤恚の瞳たゞ唇を嚙みしめる　菱明
唇をきつと結んで動かない　泰平
(佳)唇をきつと結んで氣に入らず　琴人
似た句だが後句座五の働きで稍々優る
(佳)唇を嚙んで女はきつとなり　南天
(佳)唇を嚙んで心をおさゑたり　觀月
(優)唇を衝いて不滿があるばかり　二南
後二句叙法新し

唇と僞

毒を吐く口とは見えつゝましさ　萬年青
美しい唇を嘘ついて出る　與詩夫
僞の多い唇薔薇の色　菱明
(佳)僞らんとする唇があせてゐる　二南
(優)嘘をつくその唇の持つ赤さ　恒子
稍々老ひた唇の僞に巧みなのと、若い唇の美しさが僞らんとする、いゝ對照

唇と物体

朝顔に唇一寸ふれて見る　鐵砲錢
唇がひんやりとする硝子窓　鮎美
唇にあてゝ濟ますする下戸の猪口　吉朗
唇をふるわせて尺八上手なり　雪峰
唇が冷たい酒にしたしませ竹木　忠八
唇に糸屑つけて縫ふてゐる　八
(佳)唇へビールの泡がひっかゝり　露斗
(佳)今治水もう唇が千切れそう　梢雨

唇と紅

唇がはち切れそうな紅の色　幸泉
唇へこんなに安い紅の色　雨月
イ、をするやうに舞妓は紅をつけ　梢雨
唇を彩ることに緊張し　寂郎
口紅のあまりに濃いゝ夏の晝　一風
繪封筒口紅少しついてゐる　冠白衣

南久寶寺町一丁目津島方(五)明治四十一年三月廿九日(六)小間物屋(七)貰られたは、三味線に手の屆く頃古句に好きなのが澤山有ります(八)やっぱり桃割れに、振袖と言ふのが好きです、世帶を持つて紙治のおさんと言ふ型(九)マダー之れからです(一〇)歌舞伎見物、野球、謠・近頃ポチ袋を集てゐます(一一)アリマセン御世話願マス(一二)浪花節の三味線、ソプラノ、洋樂、食物で嫌いゐなもの(一三)大正十五年六月番傘(投句)

(198) 古谷伴内

(一)古谷伴(二)伴内(三)なし(四)大阪市北區茶屋町鶴の茶屋(五)三十三才(六)會社員(七)澤山でとのわけて言へない、いゝ句は皆好き(八)鏡花の作に出て來るやうな女に一度逢つて見たいさうした女に惚れて見たいいつそ惚れられたら嬉しいね(九)これから自信のある句が作れるだらう、今までは習作時代(一〇)浮世繪、讀書、酒(一一)無(一二)キザな事にキザな者(一三)昭和二年の春

(199) 清水虚白

(一)清水吉次郎(二)虚白(三)無(四)尼崎市大物村四七〇番地(五)明治十四年四月廿二日(六)月給取り(七)枚舉し得ず(八)衛生的且つ經濟的の女、九未だ出來ませ

口紅が今宵の首尾を考へる　虚白
口紅をつけて化粧は出來上り　賀名芽
口紅のいつそ淋しい病上り　鐵庵
(佳)口紅の下の紅さか疲れきり　綠之助
(佳)唇へ濃く塗つて毒の花太路
(優)唇の紅僞りを輕く乘せ草明

句の味ひは或る靜体に動を加ふことである。終りの句此の意味に於て且つ叙法の新味に於て優れたり。

唇と接吻

唇と唇合ふて面白し　夢一佛
唇に觸れたる夜の華やかさ琴人
口付けの丘へ大きな月が出る武
(佳)唇へ情熱の瞳を向けてゐる柳笑

唇とキッスの句に尤も多數だつたが、何れも野卑に亙り川柳的技巧さへ見ない。やつと四句を拔いた。

唇と臨終

唇の何か言ひ度さまゝに逝き千鳥
筆光で唇濕す手が震ひ菊路
(佳)臨終の唇何か言ひたそう柳秀

臨終終の句も亦多數、之れは誰もがいち早く想像する着想で、從つて圖拔けた句がない。

唇と形

(佳)唇を開けば私しの若い時突支坊
唇を小し歪めたコンバクト月下
唇が開き過ぎてちと足りない子伴内
(佳)只謎の樣に唇閉つてゐ二南
菱形に開けて唇唄ふなり多聞
生蕃の顏を畫いた唇だ珍郎
唇が歪み涙の堰がきれ曼平
唇へ力を見せる花鋏同
唇に愛嬌のある話振り一舟
唇を垂れ馬車馬の喘ぎ行く高峰
唇をへの字くの字に醉ふてゐる鐵洲
唇にたるみを見せて父歸りひさし
發音に唇まわす稽古をし北城
(佳)唇も厚ふ此世に憎くまれて寂郎

唇

微笑の唇白い齒をこぼし眞柳
恩愛に泣かされた日の母の唇青柳子
唇へ吾運命は預けられ草明
唇の淋しき癖の女の子綠之助
海女の口あせて日向の唄になり湖山
(佳)唇も舌三寸の共犯者南生
唇にふれて破れた戀の夢美智郎
手まり唄唇だるい程につき陽喜亭
唇が冷たく動く齦首のこと滿
唱歌など唄う唇にはあらず露斗

ん一〇)笊碁・へボ將棋・太公望又見る事は角力、野球夏などは又甲子園ですかと人に笑はれます(一一)有(一二)表裏ある人殊に斷髪の女「禁止令でも發して貰ひ度いぐらい」

(一三)昭和二年六月松郎氏に導かれ今日に至る是れから一意川柳に精進して驥尾に附して行く決心です

(300) 柳樂花情

(一)柳樂信夫(二)花情(三)木卯人言、鈍珍太郎、青木不夜城(四)島根縣簸川郡高濱村(五)明治四十一年四月十一日(六)土百姓七)多數あれど愛に載せるやうな拔け出た句はなし。松郎氏の句風を好む。(八)肥つてゐてスラリとした女。全体が調和してゐる体。モダン嫌ひです。(九)と、なるとないと言はざるを得ません。(一〇)短歌俳句と、なんでもやつてみますが、一つとして之見よがしの物無し。(一一)一人もありません。目下物色中(?)(一二)捨てられた女多數の句を入選さして嬉しがる輩。自惚者。賣春婦。モダーンガール(一三)昭和二年三月頃。松陽新報の柳壇に投稿したが抑々の皮切り。

本當を言ふ唇を義母つねり　豚二郎
唇の苦心四聲を調節し　花蝶
（佳）唇のほかにも赤い女の子　竹木
（佳）唇の重さへ女頼りすぎ　梢雨
唇のあかさを浪費してゐます　寂郎
（佳）言ひ過ぎた時に唇蓋をされ　雨月
舌二寸の共犯者は着想の新、唇蓋をされは叙述の巧、唇のほかにも赤いは輕く、女頼り過ぎは暗示技巧を採る。

追記

集句六百五十七句、投句者百四名、前にも述べた通り頗る寛選した筈だつたが、全没三十一名に達した。是等の人の句に對しても加筆してなりとも採りたいと種々考慮したが遂に如何とも出來難く、誠に氣の毒であつた要するに全没の句は何れも着想が有りふれてゐて句の仕立の頗る粗雜である、即ち着想にも作句にも考究が足りない、もつと考へもつと修辭を練つて貰ひたい。この唇の題に對しても今類別した通り材料は多種多樣である。作句に際し想を求むるには上から見下から見横縦から、遠くから眺め近くから究めて題材を捕ゑなければならない、又句の仕立にも上五に置いたり、座五に据ゑて見たり單なるてにをはに至るまで周到の用意が肝要である。判りきつたことではあるが念の爲に作家へ苦言を呈す、暴言多罪。（八・一五・於居平洞）

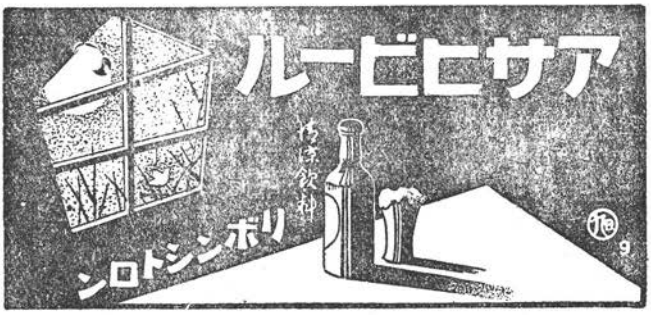
看護婦

○　可明　選

看護婦は一寸さわると手を洗ひ　正吉
用事丈け濟ま看護婦ついと出る　小蓬
看護婦へ神經質が目に餘り　二南
看護婦と一しよに町を見下ろし　竹木
ホルマリンの匂ひ看護婦それ知れ　ひさし
看護婦をうるさがる程子は癒り　伴内
看護婦の事情を聞けば哀れなり　夢一佛
退院の朝看護婦へ改まり　陽喜亭
安靜を強ひて看護婦病み續け　梢雨
脈をとる看護婦の手の溫かみ　一笑
事切れた看護婦隅にうなだれる　鐵洲
看護婦のボートにも乘る腕を持ち　孤舟

青柳可明　安井ひろし　共選

恥かしいものを看護婦にも見られ　豚二郎
看護婦の戀は繃帶卷き直し　幸泉
看護婦の目に美くしい許嫁　東詩夫
院長と來る看護婦は改まり　賀名芽
看護婦のある日曜車の人となり　漫沛樓
看護婦が噂の中に一人減り　千鳥
看護婦の氣前に女房まかせとき　虚白
看護婦の明に先生留守と知り　光路
看護婦の首のあたりをちらと見る　忠八
看護婦へ子供のやうに拗ねて見せ　柳笑
人のやうに看護婦口を利き　同
看護婦へ見掛けにより下手な文字　仰天
言ひ付けるに看護婦醫者へ言ひ　同



人力車まで看護婦の肩を借り　志郎
許嫁來て看護婦を遠ざける　同
看護婦にきまりの悪い病氣なり　泰平
これしきの傷と看護婦思ふてる　同
衛生班看護婦一人目立つてる　同
（佳）看護婦の惱み科長の悪い癖　光路
（佳）脈をとる看護婦の手を嬉しが　忠八
（佳）看護婦が去つて再び眼を閉ずる　武
（佳）看護婦を連れて退院哀れなり　青水

○ひろし選

婦長ものやわらかに面會謝絶　毒仙
小兒科で看護婦女らしさ見せ　穂波子
偉らそうにしても看護婦寂しから　寂郎
死の影へふれても常の看護婦　菱明
看護婦をあきらめ見習嫁になり　高峰
看護婦のひまある日なり腕時計　竹木
看護婦の兎も角花を習ふなり　曼平
看護婦はただうなづいて逆らはず　武
注射上手の婦長へ岡ほれる　松女
看護婦へ冗談云へる程になり　陽喜亭
檢溫器持つ手がいつか戀となり　琴女
心配の前を看護婦馳け抜ける　梢雨
うめいてる側に看護婦よく眠り　太路
看護婦ふと聖書の文句考へる　多聞
看護婦へ子供のようにすねて見せ　柳笑
下女の理想看護婦になるつもり　鐵砲錢
詰所では看護婦ただの娘なり　菊路
看護婦は醫者の注意を繰返し　志郎
看護婦は只事務的にかたづける　耕民

看護婦の持て餘してる酸素瓶　鐵洲
院長のあとに看護婦なにかさげ　眠聲
看護婦も味方に非ず淋しい日　鐵庵
看護婦へ無理ばかり云ふ水枕　雪峰
看護婦は博士の二字へ醉ひて居る　將軍星
看護婦の戀は繃帶卷き直し　幸泉
將校のように婦長は視て歩き　林亂
暗室を出る看護婦は見直され　與詩夫
看護婦はきちんとヒザを見せ　賀名芽
看護婦にとまつた蠅は數へられ　觀月
戀もなく看護婦肥えてくるばかり　風柳坊
看護婦の國の訛をなつかしみ　忠八
感激もなく看護婦に手をとられ　二南
兄の死に看護婦共に泣いてくれ　恒子
看護婦の身の上も聞き年も聞き　ひさし
看護婦と氣のあふ娘淋しすぎ　伴内
看護婦が來てから部屋が狹うなり　光路
看護婦のたゞ動くのみ手術臺　綠之助
看護婦に雜巾掛の閑があり　突子坊
資産家の後添に婦長望まれる　新水
しんみりと話す看護婦親かなし　仰天
看護婦へ家庭を話す程なじみ　柳秀
氣の利かぬ看護婦立つて居る斗り　武子
看護婦の皆美しい頬をもち　青柳子
看護婦が不衛生なる部屋に住み　素人
氷割る看護婦の手が冬にふれ　露斗
廿五の春看護婦は考へる　同
（秀）看護婦（咲く朝顔の白ばかり　鮎美
（秀）看護婦の若さへ朝の鳳仙花　琴人

御打粉
匂ひ入り
松風
本舗　伊藤大一堂
發賣　高橋盛大堂
到る所の藥店化粧品店に販賣す

根を培へ

岩本素人

犬はワンと吠へるものだと思つてゐると、長崎遼ではビョンと言ふさうだ。成程之れは面白い。全く犬の聲はワンでもなければビョンでもない　猫はニャンと啼くと山寺の和尚さんは言つたが、これも國々により、ミーンと啼いたりミーと啼いたりするこ言ふ事であるが、猫の聲も同樣ニャンでもミーンでもミーでもない。これ等の啼聲を音聲で眞似る事は出來ても、言語化する事は頗る困難である。

猫八でも口では眞似るが、文字で書けこ言はれたらさぞ困る事であらう。

音響に限らず自然から享ける感じを如實に模倣するのではなく人間の技能を以て象徴する。之れを藝術こ命く單なる表面描寫は決して藝術こは言へない。猫八や九官が藝術家でない如く。

犬や猫に限らず、人間でも嘗分異樣な音響を發する場合が多い。驚いたり笑つたり怒つたりする時なんかによく其れをやる強い浪人なんかがよくカラ〳〵こ笑つたりカンラ〳〵こ笑つたりするこ、大衆文藝家は書くが、まさか文字通りカンラ〳〵こ笑つたのではないだらうが、カラ〳〵こかカンラ〳〵こか笑つた事にするこ、いかにも豪傑に聞へるそして相手を眼中に置かない高慢な態度までが想像される。女の悲鳴こ言ふこキャーこかヒーこか書く。キャーこ言ふこ暴漢に襲はれた時か、肩先を一刀切り付けられた樣な場合を、ヒーこ言ふこ斷末魔を想像させられる。『其時女は何こも言へぬ、やな悲鳴を揚げた』何とも言へぬこ言ふ、つまり形容の出來ぬこ言ふ形容詞があるから面白い。

人がものに感じた。素晴しい感激だ。これを表現する事は甚だ困難な事業だ。だが默つてゐる事は、自分の内なる表現慾が許さない。感激は益々高潮して迫つて來る。内こ外から責め付けられる。全く苦しいやり切れない。しかしこの苦しみが極度に達しるこ不思議にも天來の暗示こでも言ふか、インスピレーションこでも言はうか、表現衝動が盛んに活躍する。その衝動に乘つて飛び出したものが、

梅の香にのつと日の出る山路哉、　蕉芭

素晴しい詩こ成つて產れるのである。

だから感激が強ければ強い程、感激から表現迄の時間が短くなる。つまり表現するこ言ふよりも、言葉が感激に押し出されるこ言つた方が適切であらう。だのに私共はいつも表現に苦しむ場合が多い。如何に表現すべきかに苦しむこ言ふのは變化極まりなき處の感覺を、極めて窮屈な既成藝術の型に嵌めやうこす

る矛盾から生じるのでなくば、感激の度が弱い爲めであらうと思はれる。で私共は如何に表現すべきかと言ふ前に、如何に鋭く感ずべきかを考へなくてはならない。

ゴムの手袋をはめて作業をすれば雷氣は感じない如く、私共は外物の總てに向つて、大自然の姿に對し、其動作に對し、その聲に對し、このゴムの手袋をはめて接してゐるのではあるまいか。

私共は手袋を脱がなくてはならない。素つ裸に成つて出直さう。さうした時に初めて鮮らしい生き生きした感銘を卒直に享ける事が出來やう。

由來詩人とか藝術家とか言はゝ人は誠に感じ易い。天分豐かな詩人程、より鋭感である。善惡に不係よく感じる。だから此種の人達は、易く笑ひ易く怒る。針で突いた樣な些細な事でも氣に病む。感じ易い上に妥協をやらないから、喧嘩をする歌を作る　藝術以外のくだらない世俗の茶事に此人達の大切な頭腦を摺り減らすのは實に勿體ない浪費であると思ふ。我々は此人達に向つて非藝術的な感情を出來得る限り愼みたいと思ふと同時に自身藝術家達も鄕達の貴い仕事の爲に、感情を處理する事を學ばれたいものである。徒なる感情の爲に藝術を冒瀆する如きは、聞くだに怖しい事ではないか。

感情を處理するとは自己を堀り下げる謂である。深く深く飽く迄深く堀り下げねばならぬ。如何に生くべきか、如何に信ずべきかに徹すべきである。そして常に自己省察を怠つてはならない。

◆

私の友、川柳人に望む所は、如何に表現すべきか、と思ふ前に、如何に感ずべきを、如何に感ずべきかと言ふ前に、如何に生くべきかを考へて頂きたい。

表現は咲出た花である。花もこより大切ではあるが、感覺である所の幹をなをざりにしてはならない。幹もなほざりしてはならないが。その人格にも比すべき根が、より大切ではなからうか。直しき人格はよく感情を處理し、純なる感覺はよき表現を促す。

根であるこころの人格を培うではないか……よき花を咲かさん爲に。

有害なる枝を切拂はうではないか　……よりよき花を得んが爲に。

（昭和三、八、十九）

古句質疑

蛭子省二

石芋へ二度目の僧のおそろしさ

（前號の續き）

其後書見中に柳里恭の『獨寢』の『團子洗ひ』の項をよむ『甲斐の國に團子洗ひといふ所あり、此村の山に團子山といふ有、此山皆團子也、昔より云ひ傳ふ弘法大師此所を通りて越ゐられたり、一人の姥團子を拵へて居たりけるに、弘法大師此團子を所望ありしに與へず、弘法怒つて印を結び加持するに、此團子悉く石の如くなりたり、姥是を後の山に棄てしによりて今に至りて如此といふ、余此物語を見るに大きさ鷄卵の如く、人の手にてまろむさも中々如斯にはあるまじ白きこと雪の如くにて、すべ〳〵として割て見れば中悉く赤っして米の如し、一山悉くこれ也、いか樣變りし物也、却て日本にてもか樣成るものには弘法の所爲と言ひ傳ふ習ひ多し、此山も定めて神代より如此ならんかなれど弘法に附會したるものなるべし。餘所の古き者に聞きて樂にもなるやといふに、此物を粉にして痘瘡に附くれば癒ゆると言へり余が工夫して水干して繪の具に用ひたり妙なる色あり、此物に膠は合ひ難し、或は余が書きし岩杯のあしらいの色鳥の毛色の中にも、此繪具用ひたる多し、氣を付て見よかし』

○

國者が嵯峨にゐるのに那須へ逃げ

東京　久水

謠曲殺生石を御一讀願ひます。班足太子の妃華陽夫人は狐であつたので落付いた仕方は華陽夫人なりそれから

孤の嫁人紺屋の所へ來る

日本に渡つて玉藻前となり

三國一の化物は緋のはかま

源翁は石　泰成は尻をわり

『不思議やな皆二つにわれ、光りの内をよく見れば、野干の形は有りながら、さも不思議なる仁體なり。今は何をかつつむべき、天竺にては班足太子の塚の神、大唐にては幽王の后褒姒と現じ、我朝にては鳥羽の院の玉藻の前とは爲りたるなり』とある。原の出處は海藏寺開山傳なり。梅村載筆に『日本下野國那須野に殺生石あり、飛鳥來りて石に觸れば必ず死す。又其邊に井あり。水を飲もの多く疾をうくる。砒霜石にてやあるらんと云侍る。唐書に是を褒姒石と名づけて日本にありと云』と。嵯峨の方は清涼寺のお釋迦樣である。

汗をかく佛の居るで清涼寺

清涼寺もろ〳〵こはいりまんなり

伽羅佛のあたりで桐のれをたづね

伽羅佛は涼しい寺で汗をかき

野乃舍隨筆に。嵯峨の清涼寺の釋迦佛は康頼寶物集保元物語墻襄抄などに、赤栴

檀にて、天竺國において毘首羯摩が作りたる佛のよし有、しかるに小右記には白栴檀と有、元亨釋書には齋然上人永次元年入宋、遂於汴都西花門外、啓聖禪院、禮優塡第二模像、乃雇佛工張榮、模刻而得之云々、又保元物語寶物囊抄などには齋然上人張榮が作れる新佛と。毘首羯摩が作れる古佛と取りかへ來朝せるよしあり。しかるに今、彼佛像の台座の銘をみるに、唐國台州開元寺□□僧保寧と有いかが。

那須へ送げた狐も嵯峨のお釋迦樣も、同じお國者とは。くゞく廻つて出來上つた句。古人にはこんなにして纏めた作が餘りに目立つ。

此の三國傳來に就ては、古來議論もあり一說を掲げむに、閑際筆記に、巧哉浮屠の佛を衒むと、昨余二客と清涼寺に詣、釋迦の像を覩、二客の曰、是三國傳來の靈像なりと、余が云不然、宋の佛工張榮が彫刻する所なり、事は元亨釋書齋然が傳中に具なり、二客口塞、傍らに一僧あり進曰、是張榮が刻所に非、齋然宋に在て、優塡第二の模像を聖禪院に拜し、欽慕に不耐、乃大宋皇帝に請て張榮をして之を模刻せしむ、既に成るを是夕齋然に靈夢有、因ひそかに榮が作所の者を以て諸〳〵を聖禪院に置て、眞〳〵を取て以歸、即是なり、三國傳來に非ずして何、余が曰、然ば則齋然が傳中に那ぞ其事を脫す、且若信に斯言ならば、齋然は乃是宋國の一盜而已、沙門戒あり、恐は不然、且豈佛人に盜道を敎んや。と、筱舍漫筆卷九釋迦佛像の項なども參照の事因に『句をかく所の居ゐで清涼寺』の句を掲げしが、伽羅佛と汗との關係は、三月十九日に御身拭の事がある、今日開帳有寺僧白巾を以て佛像をぬぐひ拂ふ、これを御身拭と云、この起りは此堂建立の人七日參籠のうちに本尊告給ふ、汝が父今牛を畜牛に轉じ此堂の材木をひく牛となる、彌增に善をなし佛果を得せしむべしとなり、急ぎこの牛を乞得て堂の側に繫ぎ、父の思ひをなして養ひしが、三月十九日にをはりける、佛果を得させん爲め牛の衣を以て如來を拭て赤栴檀の薫りをうつし、牛に着せ葬りけり、其後年毎に今日如來の妙香をうつして衆生煩惱の不淨を淸むとなり。（俳諧歲時記乘草）

開山の杖に芽の出る春の雨　武玉川

大阪　古狂

春の雨とすゐた處は俳諧式の手法である。例へば本誌四十二號拙話『句と話の會』を御再讀願ひます。

逆さまな杖一ケ寺の柱なり

なゞは適合した頓吟でしよう、此の善幅寺の大銀杏は今度、古本保存會で第一に目をつけられたもの樹齡七百二十年と、老樹齋翁がスタンプをつけました、江戸に於ける第三番目の老銀杏であると云ふ『親鸞上人了海師に附法ありてこゝを去り給ふの日、その携ふの所の杖を以て地に指して不して曰く、念佛弘法凡夫の往生も亦かくの如きかと云々、然るに此樹忽ち根芽逆に出じ、竟に枝葉繁茂し蒼々たり、故に逆銀杏樹とも號くるとなり』此の外かゝる傳說の木は澤山あります。

再び半文錢君に與ふ

三　好　革　郎

□本誌七月號で私が君に與へた一文に對する御答へが影像八月號であつたから、茲に再び君の反省を促し之を以て最後とする。君は路郎君が「二足の草鞋である所謂灰色作家に算へらるゝことの無念さに義憤を感じた結果の一文であり」「友人なればこその苦言」であると書かれてゐるが、君のこの「友情」に就いて、僕は君の人格を疑つてゐるのである。「氷原慢語」の中の二足の草鞋に義憤を感じられたのであれば、何故近所の路郎君の宅を訪れて、直接會つて忠告をしないのか、君はかつて月評會の傍聽に路郎君の家へ來たことがあるではないか、月評會の傍聽はするが路郎君の爲めに苦言を呈する爲めには、わざ〳〵廣島くんだりまで原稿を送られればならぬといふことはあるまい。君の友情は直接會つて話せば濟むことを、わざ〳〵原稿に書いて雜誌に掲載しなければ徹底しないやうな友情なのか、友人に缺點があれば成るべくそれを隱して陰でこつそり忠告するのが僕は眞の友情だと思つてゐる。君の友情はそれを世間に發表する必要があると言はれるらしい。僕はそんな友情といふものがあると云ふことを今始めて君によつて教へられた。これ第一に君の人格を疑はざるを得ない點なのである。

□君は「好漢路郎、今少しく宣傳の力をして自己の內部生命に對して進出せしむべきでないか」と苦言を呈せられてゐるが、その見當違ひに驚ろく、路郎君の宣傳は、自己宣傳ではなく、川柳を社會に宣傳してゐるのである、之は川柳雜誌社の主義方針なのであるから主幹たる路郎君が社の主義方針に忠實なのは當り前ではないか、いらぬお世話だと言ひたいこんな見當違ひな苦言を呈せらせられるよりは「ふふん……」と傍觀してゐて貰ひたいのである。

□「故人六厘坊などは先生ぶつたり、師匠ぶつたりする事を甚だ悅ばなかつた」と君は書いてゐるが、六厘坊、七厘坊、八厘坊、ひさごなどの諸氏は、皆な市岡中學の同窓生なんだから言はゞ友人仲間で川柳を作り出したに過ぎなかつたのだそれに急にその中の一人を先生と呼べといふのは言ふ方が無理だし又本人も先生ぶらないのは當然ではないか路郎君を僕が先生といふのは、川柳の上で指導を受け教へを乞ふてゐるから師匠としての禮儀上路郎先生といふのは當り前ではないか。又路郎君も師匠であり、先生であるのだから我々に先生と呼ばせても一向差支へないと思ふ。如何に句が上手になつても、如何に柳壇に於ける地位が向上しても、最初に教へを受けた師匠に對しては先生として尊敬するのは當然であると思ふ、大學の教授でも小學校時代の先生には「先生」と頭を下げるではないか、僕は心にもない先生、師匠扱ひはしてゐないから御安心を願ひたい。

□二足の草鞋に辯明がないと言はれたが、馬鹿らしくてお相手が出來ないから書かなかつただけのことで、釋明しろと言はれゝば何時でも釋明して差し上げる　第一君が引用して罵倒されてゐる路郎君の句は旅に出た時の即興詩である。丁度君が萬ようあたりで一杯ひつかけた元氣で例の「出席簿」へ一句書きなぐつた句と大差がないのである。そんな句をわざ〳〵問題にしなくても、寡作ではあるが路郎君の句は可成りあるから、それを問題にするのが當然だと思ふ。丁度畵家が旅の宿屋で女中に先生どうか　何でも結構ですからと言はれて筆をとつた　繪を問題にして罵倒してゐるやうなもので、畵家が帝展などに出品するために書いた繪があるのに、それを問題にせずに旅先の宿屋に殘した　繪を批評した美術批評家があるとしたならば、そんな批評を載せる美術雜誌は一もあるまい、然し影像といふ堂々たる(?)雜誌は斯ふした批評を麗々しく掲載されてゐる(古屋夢村君は君の原稿に可成り迷惑を感　じられてゐられるらしい)のである。又餘儀なく掲載されたのかも知れないが、兎に角掲載されてゐる。君は「しゝも打たずによしのやの書」湯もにごり話しもにごる山中や」「口説かれて千代女は一句詠んで逃げ」の三句が「愚雜な既成川柳を現代意識でゴマ化してゐる」そして「既成川柳と齊しい時代色に　捉はれてゐる」と批評されてゐるが、それは君が革新川柳は斯くあるべしといふ一定の尺度を作り、それにあて嵌まらないものは、皆んな下らないと云ふ狹い見識の下に生れた議論だと思ふ。自然主義勃興時代に一人超然として　低徊趣味の作品を發表した漱石さんの態度を、自然主義の人達が決して罵倒はしなかつた、藝術はそんな窮屈なものでなく、藝術的價値さへあれば、その作風がローマンチックであらうがリアリズムであらうが、又表現派　未來派、構成派であらうが何であらうが　一向に差支へないものである。然るに君のやうに自分の主義以外の作風に對しては之を下らないとして罵倒し去ることは、文藝批評の態度としては甚だ遺憾ながら　根本からなつてゐない態度だと言はなければならぬ。殊にその作品が即興詩であつて路郎君が全生命を　打ち込んで作つた句でない今回の如き場合は、甚だ滑稽千萬な批判と言はなければならぬ。だから敬意を表して問題にしなかつた　次第なのである。

□君の問題にしてゐる路郎君の　右の三句は路郎君の作品として決して　優れたものだとは言はないが、「しゝも打たずに」の句の如きは山中溫泉へ行く人が皆なしゝを　打つことに興味を持つてゐる中に、一人しゝも打たずに溫泉宿の書をぼかんと　寢そべつてゐる主人公の淋しい、こうした世間の人が興味を持てる情事問題に感興を湧かす事さへ　出來ぬほど疲れ切つてゐる　境地がよく出てゐてそこに人生の憐みが感ぜられこうした人も出て來たといふ時代相も　表はれてゐると思ふ

□君は「路郎君を君等の所謂革新川柳の畑から見棄てられたくない」と書いてゐるが、北海道の志貴南君　他の人々の同一の句が、路郎君の選をしてゐる本誌の近作柳樽に　拔けてゐると同時に、「川柳人」「氷原」にも君達の選に拔けて掲載されてゐる　事實は路郎君が決して君達の畑から見棄てられるやうな人物でないことを證明して　餘りがあると思ふだから決して御心配下さる樣なことは無いと思ふのである。それより君が二足の草鞋を穿かないで一足の草鞋でもよいから　完全に穿いて貰ひたいものである。君がかつて本誌に古川柳の研究を發表され、藝術的價値の殆んど皆無な和闌の句を列べて　得意になつて居られたが、僕は不幸にして君が和闌語に長じて居られることを少しも知らずに居た、川柳の研究の爲めにわざ〳〵本の少ない　和闌語まで研究されるといふ　その努力には全く感心する然しさうした和闌語の研究まで　されるといふことは、革新川柳の上にどのくらいの効果を及ぼすものか僕には一寸　分りかねる。君の極力排斥されてゐる既成川柳の中でも餘り藝術的價値のないと　思はれるものゝ、研究に辭書一つ買ふにも　本一冊を手に入れるにも可成り困難を感じる　和闌語まで研究されるといふその態度と、革新川柳を高唱し、人生問題、社會問題を取扱つた藝術味の豐かな句を作れと言はれる態度との間に　何等の矛盾が無いと言へるであらうか、君のこの態度こそは二足の草鞋と云はざるを　得ないと思ふ。

□次に路郎君が「籍すに三年をせよ、この愚雜な中からきつと　吾々の畑の者をつくり出

す」と君や日車君に口約したいふことを君は書いてゐるが、路郎君はそんな手品師見たいなことをするとは決して言ふ筈がない、愚雑な連中がいくら努力しても瓦を壁にすることは出來ない、本質的に良い素質を持つたものでなければ良い作家となり得ない事は路郎君は知つてゐる、又假りに路郎君がそんなことを言ふ筈がないが、言つたと假定してもそれを信じる君の頭の良さ加減には全く敬意を表する。君は路郎君を松旭齋天一以上の手品師で人間までも變へることが出來ると信じて路郎君の苦痛と立場に理解を持ちその苦しみを分つべく君は川柳雑誌社の賛助員の一人となつて居られるらしいが、川柳雑誌は君を客員として御待遇申上げては居るが、決して賛助員となつて御後援下さる樣には御願ひしたことは無い、も一度ゆつくり川柳雑誌を御覽願ひたい、こんな分り切つた問題まで輕卒に間違ひを書かれるのを見ると君の頭の加減がどうかなつてゐるのではないかと御心配申上げる次第である。

□序でだが、川柳雑誌創刊當時に、君と日車君が「小壜」を出さうとされた時の事情を僕の知れる限りを書いて君が「あの中から二人でも三人でも眞の作家を導き出さなければ結局、自己を引き下げて手を携ゐる事も無意義に終るであらう」と路郎君に忠告されたといふことが、君の言ふが如く眞に路郎君の立場に同情されて出た言葉でなく、君達の仕事を助けしめんが爲めの一の政略上から出た忠告であつたと云ふことを明らかにしたい

小康が生れた時に川上日車君が君と蚊象君とを承諾せしめ、路郎に對しては君即ち半文錢君と路郎君とで二面の編輯として貰ひたい僕(日車)は他の連中を引連れて他の面に陣取り、高級なものと大衆的なものとの兩面を持つたものを作らうと思ふと路郎君に承諾を求めに來た時は、路郎君は「雪」「土團子」「後の葉柳」「楊柳」と幾多の雑誌を出して失敗して來てゐるその苦痛を再たび繰返したくない、右の雑誌と大差のない「小康」を出したところで川柳を社會から認められない丁度胃の痛む人が胃の存在を知るやうに川柳を知つてゐるといふ社會の一部の人達を相手にして雑誌を出すことは不賛成である。川柳を社會的に認めさす爲めには、少なくとも短歌や俳句の域にまで藝術的價値を認めさせるべく我々は川柳を知らない人に川柳を讀ませ、味はさせる必要がある。即ち軀全体の問題として社會全般の人に川柳を知らしめるやうにしたい、若し藝術的な質の優れたものを殘さうと云ふのなら日車、半文錢、森田森の家と路郎君の四人が一緒になつて四人だけの作品を發表する機關として雑誌を出すといふのであれば、死物狂ひにもならう然し全然立場の違ふ人までを引連れて雑誌を發刊すといふことは從來幾多の雑誌が踏んで來た道と同じ道を行くことで、其結果は大抵分つてゐるから、僕は君達と行動を共にすることは出來ないといつて路郎君が斷はつたが、日車君がどうしても路郎君を放さず、水府君と路郎君を南の柴藤へ連れて行つて君も確か同席だつたと聞くが、その席上で路郎君も「小康」に入つて貰ふことになつたと日車君が水府君に言つた時に、路郎君が僕はそんな事は承諾して居ないと言つたのでその席が非常に不愉快なものになり、水府君が二次會の勘定を拂ふとしたので日車君が例の調子で怒り出したといふやうな面白い喜劇があつたことをその當時僕は聞いて日車君らしいことをやるなアと笑つたことであつた、その結果が君と日車君は「小康」を續けたまへ、路郎君は川柳雑誌に立て籠ゐそしてどちらが先に目的地に行きつくか知らないが、君と日車君は君達の立場で進めばよい川柳の社會進出を目的とする路郎君はその目的の貫徹に向つて進まうといふことで結局路郎君の「小康」入りはおぢやんとなつただから君の路郎君に對する忠告は「小康」へ引張り込まんが爲めの忠告と言へるではないか、其後路郎君が「小康」が休刊された時に經營も編輯も引受けてやるから君達は句作の方面だけに精進し給へと言つたのを、君達は斷つたではないか。愚雑な我々の爲めに路郎君の自己を引下げさせるやうなことがあつては路郎君に氣の毒だが、幸か不幸か路郎君は自己の藝術の完成には特別の努力を拂つて日夜絶へず物を讀み、想を練り、可成り苦心して一句を殘さうと努力して居られる、その爲めには近頃は神經衰弱にまでなられたくらいである。毎月良い句ばかりが出來ればそれに越したことはないが、人間といふものは機械でないから、さう佳句ばかりを

吐けるものぢやない、然るに偶ま即興的に旅先で書きなぐつた句の欠點を指摘し「友人をこきおろすが如き筆鉢も亦友情の現れである」とさんだ友情の押賣りをされては路郎君も助からぬ話だと思ふ。

□『驚のため海鼠になつたおそろしさ』『俺は彼を莫迦にしてやらう』路郎君の此の二句は「實の句を現はしたまでその實には詩が伴はない感みがある」と君は言つてゐるが、こうした感情を表現するのに君の言ふ詩（詩の意味は所謂普通の詩と解して）が伴はなくても僕は差支へがないと思つてゐる、一見頗ぶる平凡な句である、然しちつと味はつてゐるといろんな問題を提出されてゐるのに驚ろく、比喩が少し大き過ぎるかも知れないが長寛上人の書は一見子供の書いた樣な拙さで誰も良い字だとは思はない然し、それをちつと見詰めてゐると何となしに惹きつけられて所謂無技巧の技巧のうまさに頭を下げしめられる。つまりけんらんの境地を度通過して今や枯淡の域に入らんとしつゝある路郎君の最近の句の傾向が君には分らないのだと思ふ。それでなければ

お父さんはやはり川柳々々と云つてるよ
お父さんの神經衰弱がわかるかい

信心をはじめたおツ母さんも可哀さうだ

の三句に對して「幼なき靈に對する童謡的構成法であつて、この内容には路郎君自身の自嘲と自己憐愍はほのめいても主觀の報告に過ぎない」『詩の要素に乏しい』と君が言ふ筈がないと思ふ。童謡的構成法とはどんなことを言はれるのか（文字通りに解釋すると句が童謡のやうに組立てられてゐると解するのほかはないが）僕には一寸理解に苦しむこの三句から童謡なんてことがどこに考へられるのであらうそれよりも僕は古句の「南無女房乳を呑ませに化けて來い」の境地を聯想させられる。君は「路郎君の句風であれば日記の中でも多く書き得る程度の自己の感情であり、之を詩論に照らしてみれば僕等の悞る、小主觀の作風に近い」と斷定されてゐるが右の三句が小主觀だなぞと言へるだらうか君は子供を死なした經驗が無いからそんなことを言つて居られるのだ、自分の長男、而かも最も望みをかけてゐた子供を九つまで大きくしてやつと學校へ行つたばかりに取られて了つた親の嘆きは、何かにつけて出ずには居ないその親の心の苦惱を咏んだ句として僕は涙なしには此句に接しることが出來ないのだ、僕は君がロンドン君をよく知つてゐる。葭乃女史も知つてゐる、そうした路郎君の家族に關係した句を例證として揭げることが、若し君にして一片の友情あり、一掬の涙があるならば他の何人よりもその句に打たれるに違ひないと思つて以上の三句を出した、然るに君には此の句から僕が感じるほどの感鳴を受けず「實生活の報告」で「眞の意味の詩生活の記錄ではない」と片づけられてゐるが、僕は句は實生活の報告でいゝと思つてゐる。その報告が讀む者に共鳴と同感を起さしめる力があれば、それは心から心へうつたへる生きた句であり、詩であると思ふ。

茄子に明け豆腐に暮れて行く身也
住の江の紛濱は淋し汐ぐひり
（紛は多分粉の誤植ならん）

これは君の句である之は實生活の報告でもあり眞の意味の詩生活の記錄なんでせうが僕には君の達者な技巧の方が先に眼を射つてさうですかそれはお困りでせうなとか淋しいでせうなアと言へる位で眞に共鳴することが出來ない。この二句の如きは詩生活の記錄なんでせうが僕には「實生活の報告に過ぎない」と思はれる。人のことを兎や角と言はれる暇に御自分の頭の上の蠅でもお追ひになる方がお得ではないかと申上げたい」

□「君見たまへほうれんさうは伸てゐる」

といふ路郎君の舊作が新たに俎上にのぼされてゐる、苟しくも他人の句を評する時には原句を忠實に見て特に注意を拂つて貰ひたいものである原句は川柳雜誌第一卷十一號に揭載されてあるから、も一度見直して貰ひたい「君見たまへ菠薐草が伸びてゐる」である。「は」と「が」では句の意味が全く違つて了ふ、こうした誤まりは君が書いた「信心をはじめたおつ母さんも可哀さうだ」にもある。「はじめた」と「はじた」とでは全然句の意味が違つて了ふではないか、之は單なる「二十年」が「三十年」になつた誤植と同一には扱へない。苟しくもその人の句を攻擊しようといふのであれば誤植の無いやうに十分注意して頂きたいものである。

□君は前記の「君見たまへ」の句に對して「よろしくほうれんさうそれ自体に就いて自己の「伸てゐる」といふ驚異を思想的に發見すべきで「君見たまへ――」と逃げられる位置ではないと思ふ。なぜにほうれんさうによつて天地を三寸縮めたとか地核を破つたとか其他の思索系を辿らないのか」と攻擊し詩人は「ある暗示と生命を傳へなければならない」と喝破して居られるが、路郎君が鳴屋時代に裏の畑に出て菠薐草があの弱々しい葉を以て固い地核を破つて出て來たその大きな力を見て、君見たまへと思はず叫んだのであると僕は思ふ。自己の体驗から人が見脫してゐる小さな草の中に天地の精靈を感じ、偉大なる自然の力に打たれて、菠薐草を借りてある暗示と生命を讀者に傳へてゐる。それが感じられないのは眞珠を見せられても豚は何とも思はないのと同じで君は都會生活を長くしてゐて、田園生活を營む者が感じる自然の力に打たれるといふ感激を味はふことが出來ないから「君見たまへ」だけでは分らないのだと思ふ。

□君は路郎君の三十年計畫に對して「經濟的には三十年計畫の實を擧げ得ても、藝術的には三十年計畫の時間的制約は許されないであらう」とか「川柳を凡化し量的に社會へ進出せしめても川柳の實の社會進出、川柳の藝術價値の認識が成立しない」とか言つてゐるが、どうも君は川柳雜誌を讀まずに議論をされてゐるやうに思はれて仕方がない。「三十年計畫」は川柳雜誌第三卷第一號の二、二頁に掲載されてゐるからも一度御覽を願ひたい（經濟的確立、量的の發展、文壇への水平運動質的完成といふやうに考へてゐます、勿論質の問題を外にしての話ではありませぬ）と路郎君がちやんと斷つてある。分らなければ田中五呂八君に聞いて見給へ、あれは確か田中五呂氏に與ふと傍書があつた筈で。それに君は「此三十年計畫の夢に終らざる結實（實？）を祝賀する日を待たう」と言つて居られるがどうかお待ちを願ひたい、君が十年前の句と現在の句とを御自身で御比較になれば、どのくらい御成長になり、殆んど他人の句と思はれるほど過去の句は現在の君の句と比較にならないことをお考へ下されば、三十年計畫は決して夢でないことが御理解になれると思ふ。量の問題は勿論、質の問題に於ても――「君は「二十年の川柳生活を三十年の川柳生活と云ひ兼ねまじき自己宣傳癖が窃（潛？）んでゐるのである」と極言されてゐるが、僕に言はせれば路郎君ぐらい自己宣傳の下手な人は無いと思ふ。路郎君が自己宣傳が上手であれば、もつと世間的に名も出すことが出來、自分の母校の關係を辿れば實業界でも相當な地位に進み得る人である。人は己れに無いものを人から發見することは出來ない、自己の內部に在る尺度を以て他人を律し、楯の半面を見て全面だと斷定するのである。君の內部に自己宣傳癖が多少でも存在するから路郎君に自己宣傳癖があるやうに思はれるのではなからうか。群盲象を撫すの圖を想起して微苦笑を禁じ得ない。

（二三頁へつゞく）

緣談先ノ調査
資產信用調査
家出人ノ所在探査
素行動靜祕密調査

大阪市東區北濱一丁目
赤埴探偵社
赤埴秀吉
電話本局二三七一番
（祕密嚴守）（調査速止）

財產隱匿、特許侵害等ノ探偵、地方出張探査ノ依賴ニ應ズ
營業八年中無休

キャンプの夜

松盛琴人

一夜の天幕生活を試みんと八月十一日六甲停留所へ大阪より神戸より馳せ參じたる者は、路郎先生々始め二柳子、萬よしひろし、松山子、琴人、紋太、二南、亂耽、幸泉、彩秋、十字路の十貳氏々風涼しく樹々の梢を吹き渡る登山道を柳談漫談の華を咲かして登つて行く、間もなく下からおくれ馳せに登つてくるかほる君の姿が目に入る、「かほるサアーン」と上から呼び上げればかほるさんの足は急に車でも付けた樣に早くなり忽ち一行中の人となる。

漸く六合目の清水茶屋へ着いた、剩ます行程は二十一丁、案外樂なもんだと早や高をくゝつて氣付樂なりと萬よし君と亂耽君がウィスキーを取出せばひろし君は暑い〳〵とラムネをほん〳〵開ける、一休みして二柳子君を先登に山頂に達したのは暮靄立罩めた七時半、ウンサ〳〵と遲れて登つて來るのはひろし君、百里位ひは一足飛びにも仕兼ねまじいスタイルに拘はらず眞つ先きに兜を脱いで亂耽、二南の兩君に尻押をして貰つて漸く登つてくる、それでも口だけは達者なもの、押されも分らぬ細君の惚氣を言ひ通したとあるから流石にエライもの……

一同は早速氣溫六十度の食堂のテーブルを占領して酒黨の琴人、松山子、かほる、松山子麥酒黨の萬よし、ひろし、亂耽、紋太氏等は盃とコツプを盛んに傾けて、アルプス踏破と云ふ意氣で氣焔萬丈、軈がて彩秋、華水兩君のハーモニカ合奏に合せて鼻を摘まれても分らぬ眞闇な山路を華水氏のカンテラに案内されて六甲山頂を行進して天幕村に着く、時に午後九時半

一同は天幕内のベツトに陣取つたものゝ誰一人眠いとも言はぬ宵つぱり揃ひ、歡談笑語に時を忘れてゐると二南君の鈴ケ森の一幕が皮切りに同人諸君の隱し藝が次々に發表されて疲れも眠むさもすつかり忘れて大いにハシヤイダが、それも一段落となれば皆んな神妙に句三味に入る併し其内に地上より廿度以上も低い山頂の冷氣は刻々に身邊に襲ひ來り、作句熱も睡眠慾もすつかり破壞されて神經が昂奮して來てたゞ夜寒の冷氣のみが氷の如くにこたへて來る、其處で一同は此氷の如き冷氣を擊退する一方法として再び十八番の隱藝を披露する事になる、隱し藝の秀逸は華水氏の落語、路郎先生の象の眞似、亂耽の道頓堀行進曲、松山子の遊輔の歌、かほるさんの戻り橋の聲色、琴人の二上り、二南の時事落語、萬よしの勘兵衛腹切の聲色等皆な玄人以上と折紙をつけられる、斯くて又二南氏の發案で名指し遊戯が始まる、仕損じは罰盃罰盃即ち酒を呑む事也の定め此定めこそ幸ひなりと罰盃相次ぐの盛況に幹事終世の智慧を振つてハンデキャツプとして一藝を附加した爲め眞面目な紋太氏までが一藝（童謡）を演ぜられたが實に紋太氏らしい童謡に一同感心

斯くて一夜の天幕生活は寢臺に横はりつゝも寒さに寢もやれず、止むを得ず談笑しの雲に八方に飛ばす就中、萬よし氏最も頭のよさを發揮す、山頂にも時の歩みはあり談笑の海より靜かにいと莊嚴に訪れて來た霧の太陽は彼方の光景がパノラマの如く展開して來る。一同忽ちにして天幕附近一体には翠巒明美の岩清水で洗面し清澄なる朝の空氣を貪るやうに吸ひ込みつゝ池邊を逍遙して天幕生活の快味を充分に味はつて思ひ〳〵に下山したのであつた。當日夜來收獲する處の名吟は左の如し

兼題 避暑　路郎選

戀もなき避暑は海月になじむなり　萬よし
海岸を歩くせになり　彩秋
避暑の子は淋しいなアと寢てしまい　松山子
算盤を持つ手に避暑を考へす　二南
愛犬と椽側に居る避暑の父　亂耽
避暑と云ふ氣分が海を涼しう見　琴人

テント村 雜感　路郎選

灯を消せば山が見へ出すテント村　松山子
天幕村池へ映つて夜が明ける　琴人
六甲は高いと雲なのぞいて　同
テント村玄人はもう寢て了ひ　二南
隱し藝テントの幅に行きつまり　同
背景に虫を鳴かせてテント劇　萬よし
童謡の隱し藝などテント更け　同
テント村池を狹んで別に寢る　亂耽
ブシーのくらしを思ふテント村　同
灯を消してテントの一人唱ふなり　同
口丈は達者に足のはかどらす　ひろし
たつた一日の避暑に風邪を引き　同

各地柳壇

青明忌（神戸）

（主催）川柳雜誌社神戸支部
（後援）川柳雜誌社

八月五日　於四宮神社々務所

大阪よりは路郎主幹、二柳子、萬よし、神戸よりは紋太、卯生、二南の六名、春日野なる藤村青明の墓に至り懇ろに故人の冥福を祈る。

句會＝＝＝朝來の暴風雨尚止まず主催者側を案ぜしめたが熱心なる作家卅三氏を迎へて作句三昧に耽る。路郎主幹の青明追憶談あり。故人と殊に親交ありし主幹のことゝて色々の逸話を聞くことが出來た。最後に「第二の青明、第三の青明の出現を神戸柳界に望む」と結ばれ參會者一同深く感動する所があつた。

出席者＝＝＝路郎、ひろし、文蝶、柳狂、梅雅紋太、二柳子、一狂、重陽子、旅雨、嶺月、二南華水、卯生、志郎、鎌月、素生、亂耽、寄舟、萬登三笑、秋晴、千鳥。　＝楊井二南報＝

席題　伴　奏　　互　選

伴奏と夫婦かいなと思ふなり　素生
花形が出る伴奏になつてくる　二南
伴奏も腹では歌を唄つてる　同
伴奏のオールバックがよく光り　ひろし
死の歌をおい等も伴に奏さんか　重陽子
伴奏者だけが一足先に着き　嶺月
伴奏者若い燕の樣に見ゐ　同
この唄のこゝが伴奏ほんに好き　鎌月
伴奏のふとシャンデリヤ仰いで見　同
連れ彈きといふ伴奏へ最屓客　旅雨
伴奏の愚痴尤もに聞いてやり　同
伴奏へ花環は裏を見せて立ち　紋太
伴奏のうける拍手に候はず　同
着座して伴奏樂な姿なり　同

席題　風　　ひろし選

古本屋今夜の風をもて餘し　素生
ガラス戸の外は植木がゆれてゐる　華水
吹く風に身の零落を敎へられ　重陽子
洗髪昨日はにらい風どした　三笑
母も子も風を恐れる性でゐる　二南

びつしやりと出れば夜風につきあたる　鎌月
好い風の好い場所にゐる二階借　一狂
風に引きづられ夜更を戻りぬ　亂耽
停車場から一すぢに風の街　同
ひとり立てば風ふところに入りにけり　路郎
風の音風の影さへ四十過ぎ　同
（軸）とぼくと歩めば風も吹いてこず　嶺月選
席題　未亡人　ひろし
父のない子と委はさない未亡人　梅雅
物云はぬ寫眞を見てる未亡人　紋太
勳章の話が長い未亡人　二南
未亡人噂ゝ立たず痩せてゐる　一狂
朝顔を見つめあそばす未亡人　同
親戚はうるさいものと未亡人　文蝶
未亡人男手を借る大掃除　同
（秀逸）未亡人道頓堀の夜に疲れ　亂耽
席題　不孝　紋太選
不孝者盆にどこやらから戻り　卯生
旅歸り不孝を詫びる顔でなし　二南
案の條不孝なハネを上げて來る　萬登
不孝者都會の風邪をひきなれる　亂耽
不孝な奴だなと妹の世話になり　嶺月
不孝者そんなに不孝かと思ひ　三笑
親の年忘れて遠く住んでゐる　ひろし
父と女をかんかんにかけ　路郎
忙しい日不孝は昨日から居らず　素生
約束を楯に出て行く不孝者　同
（人）不孝者父の姿に生き寫し　重陽子
（地）六十の父に素氣なう下駄を履き　一狂
（天）夕刊と二階へ上る不孝者　同
（軸）つきあいをひろげ不孝を續けて居　紋太

兼題　煙　路郎選
姑の目には一としほ煙しみ　一風
干してから目見得お湯屋も目にまり　四方路
不細工な鼻から煙り出して見せ　光哉
父さんを工場の煙がほそう見せ　鎌月
煤煙の底に人の子生れたり　亂耽
煙の中にみんな達者な飯を食べ　一狂
不平あり煙の多い町にゐる　紋太
馬上ゆたかに淺間の煙見る　杏三
吐き出した煙と共にことはられ　同
人間が煙りで終ゝ阿房らしさ　鐵洲
火葬場に今日も煙りが續いてゐ　同
煙　煙大阪は生きてゐる　卯生
香の煙嬰兒の方へ渦卷くや　同
急用で來たのへ煙つきまとひ　二南
饅屋の包丁へ煙下りて來る　同
故人を懐ふて
（軸）煙煙青明の顔けむりの輪　路郎

川柳雜誌社事務所句會

八月一日　橋本二柳子報

當夜月二會の幹事の木三二竹の二氏及び來阪中の松江市幹事の松丘町二氏、路郎先生、萬よし、かほる、琴人、革郎、三笑、孤舟、加香、舟々、多聞、翠峯と私とで蒸し暑い一夜十一時すぎに散會いたしました。

失　敗　町二選

失敗の家へかへれば妻が待ち　翠峯
失敗を世間の罪にしてしまい　革郎
失敗に父の遺産も殘りなし　二柳子
失敗になんにも言はぬ父が居る　孤舟
失敗の肉親だけが寄つてくる　同
愚人だからと借りたが悪かつた　木三
失敗とわかり圖書室暮れて出る　同
失敗へ失敗をする氣でかゝり　琴人
失敗の經驗をつみ丸うなり　同
失敗の候文で書いて出し　かほる
失敗へ石鹸入れがさびて來る　同
失敗にいとど眼鏡がくもりかけ　二竹
失敗に浮かばぬ酒と知り乍ら　同
失敗に二度立上る事もせず　同
失敗に計畫矢鱈ある斗り　三笑
破産して我が子の寢顔見る斗り　同
今の彼には灰色の外に無く　路郎
失敗の父は散歩と稱して出　同
失敗のすてどこもなし蟲を聞く　同
生活を顔に出すなといふてたに　同
自らを責めて小さく住んでゐる　同
（軸）失敗にゆらぐなかれと父の文　町二

盆踊　萬よし選

盆踊廻り待つ間の長い事　洸々
盆踊り頑固な父が音頭とり　木三
盆踊り姉が居るのが物足らず　二竹
盆踊神木の根へけつまづき　琴人
盆踊村長さまの腰つ付き　町二
盆踊揺つて欲しい手を振つて　孤舟
出戻りの姉を誘ふて盆踊　舟々
丑寅で時々光る盆踊　翠峯
近々に一降りほしい盆踊　同
盆踊今年の秋に嫁ぐ娘なり　三笑
帶上げの浴衣に染る盆踊　同

盆踊帶がゆるんで輪をはづれ　かほる
盆踊後から入るきりょう好し　同
(軸)盆踊り女工の浴衣目立つなり　萬よし

川柳雜誌社　螢ケ池支部句會(大阪)

安四　杏三報

梅雨の樣な雨ばかり降つた八月五日支部句會を開きました。此日青明忌に御出席の萬よし、二柳子兩先生に一寸道よりして戴きました。

兼題　鑵詰　萬よし選

鑵詰を切つてお客に詫びをいひ　不希
鑵詰のうまさ眼界展けてゐ　寂郎
鑵切りの手つきへ亭主起き直り　光哉
テント村鑵詰にあき海苦にあき　杏三
鑵詰の喰さしへ猫足を入れ　菊三
鑵詰の土產鰹入あけさゝれ　同
鑵切も添へて見舞の行届き　同
(佳)鑵詰の殼は地上げに蹴散らされ　同
(軸)鑵詰へいける四五人輪を作り　萬よし

兼題　氣　樂　二柳子選

慾と戀捨れば俺も氣樂だが　湖舟
施療院患者氣樂さ見せて居る　葛西
行末は天に任せて玉の汗　萬よし
氣樂さは植木の手入れ日を過し　邦郎
閑靜で氣樂ですよと左遷云ひ　唯一
泣いてるを氣にもせぬのか編む手守　光哉
大聲であけつ放しの話なり　寂郎
(佳)人は皆氣樂なやうにくらしてる　同
(同)兎や角と謂はれ乍らの酒を呑み　光哉
(同)少々の趣味へ氣樂にして終ひ　菊三
(同)氣樂さは唯念佛に日を送り　不希
(同)氣樂でもないと姑孫を連れ　杏三
(軸)待たされて誘ひに來れば寢てます　二柳子

席題　魚　釣　互選

あぶれ屋は吳れてやるわとこぼす投げ　唯一
淀川が廣し釣竿並ぶなり　二柳子
英雄を氣取つて何も釣れぬなり　杏三
釣上げて其大きさを疑はず　葛西
釣れる日の弟は餌へ走らされ　萬よし
釣は君腕にあるよと蓋を取り　同
何匹か釣る氣で出たをひやかされ　光哉
せかされて居るはも少し釣りたい氣　同
雜誌の記事の通りに魚來す　菊三
魚釣も馬鹿にならない入費なり　同
養生の釣は時計を見て歸り　同

川柳雜誌社　糸屋町支部句會(大阪)

五月二十日夜　於博物館　川合舟々報

兼題　井　戸　松郎選

靈驗の井戸に昔の水はなく　義情
釣瓶繩四十幾尋おそろしや　武子
井戸水を汲みに來て暇取るかしら　白蝶
今沈む陽井戸堀りの背へ落ち　葉平
おぢかした井戸から西瓜上げてゐる　琴人
こわがらす方も覗いた古い井戸　一醉
朝起きの子へ汲んでやるつるべ繩　舟々
貰ひ水今日も井筒を洗て行き　幸泉
井戸端をぬらし遠足もこの列　陽喜亭
井戸がへに子のいたづらが分つて來　吉朗
案内の井戸覗かせたゞけで濟み　萬よし
遊び疲れて戻れば井戸のひやし麥　鮎美
齋戒沐浴井戸水はつめたし　眠聲

川柳雜誌　籔川支部　たかせ會八月例會(島根)

八月十日夜　於雷相居

臺灣から夏休みで歸省された、元同人堀西冬木立君を迎ふる。　伊藤綠之助報

兼題　出　世　雷相選

(佳)脫黨の果が出世の仕損ひ　鐵漿
(同)出世して小鳥も一羽飼つてゐる　冬木立
(同)老ひた母博士になつた子を迎へ　幸永
(同)軍曹になつて少ゥし髮を立て　綠之助
(同)出世したほどに兩親呼び寄せる　同

席題　風　鈴　冬木立選

(佳)風鈴の音に逆つた笑ひ振り　幸永
(同)風鈴の音も清らかに流れ星　綠之助
(同)風鈴が鳴る〳〵病室の風　同

席題　團　扇　互選

さびしさは團扇と共に寢て了ひ　冬木立
行末を思ふ涙の澁團扇　綠之助
絹團扇一本落ちてパルコニー　同
社の事を話し團扇の差向ひ　雷相

席題　奇　怪　互選

はつきり奇怪な場所に俺は立ち　幸永
人を呑む海で一夜は明けにけり　冬木立
奇怪な噂の家のいゝ女　綠之助
その奇怪身振り手振りで話してゐ　雷相

席題　盃　洗　互選

盃洗を冠り社長の隱し藝　幸永
未だ醉はぬのは盃洗へ用があり　雷相
盃洗の色も淀んで醉ひつゞけ　綠之助
盃洗で酒・強ひられし戀仇　同

盃洗へビールの口がフイと飛び　冬木立

川柳雑誌社
加古川支部　**めだか吟社**（兵庫縣）
於黄彩居　十公報

題人生

人生を飾るに戀の花もあり　泰山
人生を怨んで死んだやうな顔　同
人生を蝙蝠安はゆすつてき　洛陽
裏長屋人生に何の執着かある　同
一生を働くと云ふ語に終り　十公
人生ははかなきものよ戀の果　梅更
人生を暗示するやう蟬は死に　黄彩
人生に疲れ果てたる姿なり　同

題海

青海の沖にちんまり向島　梅更
空想を描いて今日も海に來る　十公
夜の海悲鳴の樣に迫つて來　泰山
海水着皆の視線の的になり　同
唯一人夜の潮鳴り怖う聞き　黄彩
高い涙來る度母は伸び上り　同

題西瓜

夏祭り西瓜の市の樣であり　泰山
末の子は四瓜抱へて聲をあげ　同
宵祭り西瓜の甘い香が匂ひ　十公
末の子が戻つて西瓜切らされる　同
テツてゐる西瓜を指の背にみる　黄彩
庖丁が笑ふ西瓜へまたすべり　同
西瓜畑涼しい蚊帳が浮いて見へ　梅更

題打水

寢そべつて打水をする叱言いひ　泰山
打水を仕事の樣に　隱居　同

雷の音に水打ち一寸待ち　梅更
打水を家の中から禮を云ひ　黄彩
打水へどのかわいた蝶が來る　同
ハツとした杓へ視線が合つちまひ　十公
打水の我が家へ歸りホツとする　同

題居眠り

居眠りは雲踏み外した樣に覺め　黄彩
うと〳〵と傍の話しが夢になり　十公

川柳雑誌社
鳥取支部　**川端柳社句會**（鳥取）

鐵洲報　聽松選

兼題夜店

子を連て夜店の街のはかどらず　佳水
夜店からたまに買うたを叱られる　源太夫
縞疵は夜店で買うた不覺なり　稻花
喧嘩かと覗く夜店の瀬戸物屋　耕民
肩車ヤツト夜店の街を拔け　鐵洲
夜店から何ンにも買はず疲て來　青水
月給日女房夜店に出る支度　一風
（軸）夜店から嬶拗れてゝ物言はず　聽松

兼題蚊　舌長選

蚊いぶしの消へて生醉いびきなり　源太夫
散髪の足に來る蚊を持てあまし　稻花
眞裸西瓜を置ひて蚊をたゝき　耕民
醜悪を覆ふが如く蚊帳は垂れ　鐵洲
腹立ちを派手にたゝひて蚊をつま　穗波
ながら屑を燻して客に蚊を詫びる　青水
（軸）枕蚊帳のぞけば覺めて笑って居　舌長

席題避暑　互選

避暑に來て追使はれる叔母のうち　佳水
避暑客に同じ日本の陽があたり　源太夫

出勤の靴の重さよ避暑歸り　耕民
避暑に行く人をうらやむ汗を拭き　湖山
瀧の軸大床に水盤放我　穗波
追はれてる暮しは避暑は別なもの　鐵洲
避暑客のカバンが汗で届けられ　青水

川柳雑誌
姫島支部　**コーヒの夕**（大阪）
（六月十七日）

題朝顔

もう蜂をよぶ朝顔になつてゐる　觀月
朝顔の鉢へ齒磨散つてゆく　同
朝顔のそばへ白靴はして置き　鮎美
朝顔をかゞんで見てる泊り客　同
朝顔の鉢へ鏡を立てゝ剃り　同

題ステツキ

ステツキへ少し放れてついて行き　里十九
同じとこ突くステツキの立話し　觀月
ステツキで動かして見る落しもの　同
ステツキで香具師ぱつぱつと人を寄せ　鮎美
ステツキはボートへ何か話しかけ　同
ステツキの秋も輕く風をうけ　同

川柳雑誌社
六月十二日夜於博物館
糸屋町支部句會（大阪）
川合舟々報

兼題入口　松邨選

遠慮してゐる入口へ出前が來　翠峯
入口をくゞるに婿の背が高し　一醉
入口を仆は後ろ手にしめて　三笑
入口を氣にして母をまるめて居　毒仙
御不幸へ近所入口狹ふ來る　陽喜亭
ブルドックその入口を離れない　里十九
叔父さんについて入口狹う入り　琴人

氣の弱いのが入口に殘つてゐ　溪水
入口へ來てまだ早かつたなと思ひ　柳河樓
入口をたのんでうどん云ひに行き　かほる
入口で昨夜の思案變るなり　新水
辻占へお向ひの戸があいたらし　彩秋
入口まで嘘を考へもつて來る　赤城
入口に佇む戀の十五六　亂耽
諦めた時分入口開けてくれ　流星
ひやゝかに唯ぶ入口からの石　舟々
重役と同じ入口くゞつて來　義情
入口を締めて賣上調べて居　素人

川柳雜誌社小松支部　**芦城川柳社**（石川縣）

＝三笑、銀砂子、三波子、冬青、諸氏歡迎＝

七月十日　本田柳一路報

炎天の下にあへいで居るもパン　盜鐘
蒸暑い蚊帳で隣の二時を聞き　芥路
ギラ〳〵と雲の上に夏を見る　柳一路
ものたらぬ事盃洗へ水を切り　冬青
盃洗へあけたも知らず醉ひたまふ　德兵衛
盃洗へ虫の溺れる夏座敷　三笑
ひるめしを何處で食べたか素浪人　久流美
浪人になつたその夜は雨なりき　柳三
浪人の今日は上野の鐘を聞き　銀砂子
くつきりと白雲の中に青い山　錦水
公休日指が氣になる染物屋　水聲
敵娼へみんな呑めとはいはぬ也　同
パトロンの趣味にあふやうな柄をきて　茂葉
久し振り寢顏一層ふけて見ゐ　同
氣の弱い私しいつまで褄を持つ　小半
淋しさは眞面目に惚れてしかられる　同
疲れてる顏を眞面目と素見され　玉枝
固練へ今更年のをそろしく　同
遊興稅浮世を別にするお金　三笑
ウエターを罵倒してゐる中年增　同
ほんとうに泣く日のつゞく中年增　同
中年增今年の夏もやせてゆき　加香
タブレットだけの驛へ停車する　同

川柳雜誌社金澤支部　**社友座談會々報**（金澤）

第三回社友座談會は八月四日、第一土曜の晩開きました、柳二郎、紅の花、銀砂子、祖影、好次君と私の都合六人、當地としては珍らしからぬ少人數の集りでありました。

然し句會は多人數の集りを持つて、至上とは謂へない、むしろ多く集つたときは欣か感じる丈で、夫が結果の上に佳い影響を與へる場合が至つて少ない、少人數のときは誰々も誰々もと云ふ寂寥感を抱かせるが、反動で、今日はみつちり作ろうと云ふ彈力性が、己づと湧いてくる。

今回の座談會は少人數でも、作家としては言分のない程粒が揃つてゐたので論議された事柄も記錄して良い程秩序を失はず進行した兎に角、常識論に終始してゐる金澤としては柳二郎、紅の花、銀砂子、三君の今後の活躍を期待する、また祖影、好次君邊りの句の進歩の速かさも、一驚に價する。中川眼隱子報

川柳雜誌社　**糸屋町支部句會**（大阪）

七月一日夜於博物館　川合舟々報

兼題　夫　松　耶選

氣短な夫を思ひつゝ送り　舟々
子が出來てからの夫をうたがはず　翠峯
實家へ來た夫大きく笑ふなり　悟耶
夫とは意見を別に寢てしまひ　新水
變人ですと夫をかばい　萬よし
夫と共に疊叩けば埃が出　鳴玉
機嫌よい夫の猪口を受けるのみ　彩秋
日曜日夫朝から水を打ち　三笑
夫まだ緋をぬがぬ若さなり　一醉
助けても〳〵夫の愚痴　石竹
人混みに夫の意識よみがへり　京耶
女氣の夫を借じ乍らにも　白蝶
夫の愛に引きずられゆく　亂耽

月二會例會（尼崎）

七月十四日　二竹報

ボーナス　松耶選

ボーナスの中味に過ぎた包紙　藏六
ボーナスで返すつもりの借りが　龍三
きまつてゐて嬉しい賞與金　文月
ボーナスへ子供各々申し出る　木三
ボーナスを貰へる日なり靴をはき　呂久
月給は云はずボーナスばかり云ひ　同
豫定の日豫定の額の賞與也　虚白
八百屋まで知りぬかれるボーナス日　同
ボーナスのもう拂ふのはないかな　吟女

ボーナスのやはり保險に入りら　同
賞與金斯くて給仕のませてゆく　松郎
馬鹿　松郎選

馬鹿らしい事にも馴れて生きてる　二竹
小遣帳馬鹿にならぬとつけ初め　龍三
あの馬鹿何にが出來るとうそぶいて　吉期
一生を馬鹿と生はれて暮して來　文月
馬鹿だとも云へずだまつて聞いてる　木三
馬鹿一人殘して娘みんな嫁き　二水
馬鹿の子も同じ樣に箸を持ち　同
唇をかむ母へ馬鹿背を見せ　吟女
母の涙が少し馬鹿にもわかり　同

南海至誠　**川柳の會**（天下茶屋）

八月拾三日午後六時　於濱寺海水浴事務所
竹内多聞報

起き拔け　路郎選

起き拔けにゆうべの玩具抱いて來る　多聞
起き拔け藝者は輕い世辭で去に　柳骨
起きぬけに驛前へ來て牛乳をのむ　五輪
起きぬけのタオル寒さを覺へ出し　一杉
起きぬけに振り切って行く氣の强さ　朝陽
起き拔けは垣根越にも會釋あり　黑天子
起き拔けに人の二人も訪れて來　萬年青
起き拔けの眼に蚕豆の皮ばかり　呑陽
起き拔けの襯衣は返つたまゝにあり　貴山
起き拔けに夢でなかつた騷ぎなり　樂汀
（人）起き拔けの蚊帳はあたまに引かる　一杉
（人）起き拔けに妻をゲートル借りる　泰平
（地）蚊帳の吊手一隅はづし旅支度　同
（天）起きぬけを隣の人に手をかられ　朝陽

雜吟　路郎選

無事故の無沙汰と親は思つてる　五輪
甲子園こんな暑さを求めに來　呑陽
重役のやうに書生も出勤し　河内
あのとほりとう〳〵色がさめました　樂汀
講習會戀しい人が出來た丈け　同
公園の朝あてられて通りぬけ　瓢雹樓
雨の日はモダンも出足鈍ふなり　黑天子
妻にして見れば女給は女給なり　艶之助
何事も默つて妾嫁ぎます　樂汀
佛壇の團扇去年のまゝにあり　朝陽
愛の巢の疊へ醬油こぼしてる　貴山
罹災民マッチの怖いことを知り　同
謙遜の寫眞うしろでかくれて　同
はじめから實ふつもりで借りてる　靜石
（人）ショーウインドーへ立て制服うつる　一杉
（地）誇大妄想狂この頃は支那語なる　泰平
（天）東西屋ハガキ入れるによけてく　貴山

席題　波　互選

波の音耳に入らぬ戀もして　黑天子
足許に波をよぶのも女の子　多聞
此の波に俺の心を預けやう　呑陽
棧橋へつくとボートは波にゆれ　朝陽
白い足波に打たせて言ふてる　瓢雹樓
工場から波の輝き戀しくて　一杉
全快も近く波打際により　呑陽

席題　あめ湯・甘酒　互選

湯上りへ甘酒賣の聲をきゝ　朝陽
裸から裸かへ渡る甘酒屋　同
甘酒の湯呑のかけたまゝに出し　貴山
甘酒もよく出來ました秋祭　半田
横向いて甘酒のむも女なり　彩峯
甘酒屋明日の天氣を尋ねられ　同
甘酒にみんな尖つた口をよせ　呑陽
甘酒屋不審の人を見付け出し　彩峯

名賀壽會例會

七月十五日　於虛白居　玄洋報

席題　鉄勤　互選

鉄勤をお目玉に反抗氣分鉄勤し　前川
鉄勤はしたが彼女はやつて來す　きくを
鉄勤ときめても一度飲み直し　虛白
鉄勤が續いて家は暗くなる　悅路
一方は上乘首尾で鉄勤し　曳白
鉄勤のわけに母親智惠をつけ　玄洋
鉄勤の手前頭痛膏貼つて行き　吉期
そろ〳〵と地金が出たか鉄勤し　同
よく沙魚が釣れる話に又休み　眠聲
鉄勤へ夕べの蛸が引き出され　同

席題　團扇　互選

晩酌をあほぐ女房の馳走ぶり　前川
はた〳〵と團扇は闇を叩いてる　悅路
素見の客は團扇で叩かれる　曳白
あほぐより表の柄を先に見て　きくを
客數に團扇のたらぬ新世帶　玄洋
いゝ返事娘團扇のかげでする　同
お勞れと團扇に情けこめてあり　吉期
親分へ仲居の團扇寄つて來る　虛白
關取へ女將團扇で話してる　同
夏景色團扇も買ふて新世帶　眠聲
盆踊團扇忘れた娘も踊り　同

席題　夕立　互選

夕立ちが來さうと女房子を渡し　曳白

驟降りて見ればこちらは降って居ず　眠聲

兼題　理　屈　眠　聲　選

理屈では行かぬところに神を置き　玄洋
マア〳〵と理屈はぬきで仲直り　同
相談を又理屈かと叔父は言ひ　虚白
又しても親方理屈で通すなり　きくを
纏まった話理屈が邪魔になり　吉朗
理屈とは違ひ息子に先き立たれ　眠聲

琴人居土用會　（大阪）

課題　裸　　松盛琴人報

親しさは裸同士で呑んでゐる　壽枝女
糊買ひに裸の子供連れてゐる　同
裸なら醫者も乞食も臍ひとつ　洗洗
避暑客は肌の黒いを自慢にし　同
這ひますと肥えた裸の尻を見せる　琴人
すつ裸戸籍調べへ周章てたり　同

同偶會　（大阪）

題　砂　糖　　素人

砂糖のないおはぎを呉れた様な世辭　丹溪
或時は砂糖のような人で有り　武子
砂糖加減しゆうは傍でにらんでゐ　琴人
砂糖屋の主人はいつも羽織を着　洗洗
追憶は砂糖のやうに唯あまく　洗洗

電氣句報柳壇　（大阪）

安井ひろし報

落花生ひつきりなしに音をさせ　花扇子
次々に踏まるゝ段のつらなれる　休歩
夏姿子のない女透きとほり　松水
逢ひたさをかくし氣強い姉藝者　燕柳
死んでゆく顔を粧して二人笑み　仙湖
寢そびれた耳へどこかで雨が洩り　同
暮れがての露路へつまづく買ひ藥　同
刑務所を出て青空へけつまづき　同
空想と煙草に飽いて蚊とれむる　花情
行く春を女權論者子をはらみ　同
萬一を恐れることは一緒です　同
運命と思はば添ふてゐるがいゝ　同
人間のおろかさ墓口括りつけ　同

かぼる居偶會　（大阪）

七月十九日　　高橋かぼる報

座談會、佛、石、夜遊び

座談會紅一點がよくしやべり　愚陀
灰皿がも一ツほしい座談會　かぼる
佛像の歎きに高しビルヂング　愚陀
手に取つて見れば佛の二皮目　かぼる
丹念に石を集めて博士老ひ　愚陀
ちと遠く行つて二度目の石を投げ　かぼる
夜遊びに香水の香が薄らいで　愚陀
夜遊びの肥へた女が面白く　かぼる

月二會例會　（尼崎）

七月二十八日　　二竹報

席題　老夫婦

ぼろくそに孫にやられる老夫婦　二水
老夫婦別にかまどをたてて　同
もう嫁のことを云はない老夫婦　吟女
あの子には諦めてゐる老夫婦　同
落付いて話せば話す老夫婦　二竹
ほんとうに幸福でなと老夫婦　同
暑さにもめげず田にゐる老夫婦　同
天盃に昔を偲ぶ老夫婦　同
町内を皆よび棄てに老夫婦　木三
長火鉢ひかつて淋し老夫婦　同
老夫婦小使錢をしぼられる　同

席題　カーテン、物干、金、ピンセット

朝鮮人、色男、ビール

カーテンの向ふに女すいて見に　文月
カーテンに顔だけ出して左様なら　柳蛙
赤い灯をしさてビールまづう飲み　木三
朝鮮人日本語を知りひげを剃り　同
ビールの泡みつめて居ればあぢきな　同
あの人がほんまに朝鮮人だつか　吟女
金さへあれば思ふ町を過ぎ　同
ごちや〳〵と朝鮮人の兒が遊び　二水
呆然と朝鮮人のうづくまり　同
傷口でピカリと光るピンセット　同
物干へとり殘されし二人也　同
愛の巣へ母から金が送られる　二竹
ピンセットやう〳〵抜けたイキつが　同
朝鮮人國には親もあるだらう　同

兼題　寛　ろぎ

くつろげば風呂へ入るのもいやになる　鴨川
酒呑の伯父をかへしてホッとする　龍雄
寛いで飲むに足りない膳の上　吉朗
旅戻りせまい庭さへうれしくて　吟女
くつろいだ姿は彼もただの人　正雄
寛いだ妻のふけたを淋しくみ　同
氣も知らず寛げなどと里の母　虚白
寛げと云つて親分坐り替ゝ　同
寛いでから忘れ物思ひ出し　木三

くつろいで下女の話も聞いてみる　同
くつろいで家形の書の明るすぎ　二水
くつろいで貧乏同士馬があひ　同
寛いで土砂降る雨の面白く　二竹
寛いだとこへ酢だこが運ばれる　同

偶會一束（大阪）

八月四日　松盛琴人報

夏の雨夏の雨ぬれて戻れば虹みてる　琴人
夏の雨物干少しぬれただけ　同
夏の雨お經もの憂ふ聞へて來　壽枝女
夏の雨お岩の話怖ふきゝ　同
夏の雨つき添ひそゝと窓を閉め　洸洸

八月八日　寢衣、字引

十九貫寢衣ほらきれさうに着る　琴人
チウ〳〵がと脅して寢衣さかへまと　同
寢衣さたまゝで巢卷をふかし　壽枝女
階段をおりる寢衣へ猫がじやれ　同
日曜日寢衣のまゝで正午となり　加香
お寢衣の糊でもめてる二階借り　同
劃引へ音だけ知って間に合はず　琴人
タイピスト字引にないとたてをつき　加香
初孫の名付け字引へ念を入れ　壽枝女
よう文字をさがす字引の紙がすれ　同
センチユーリ博士の書架に九尺なり　洸洸

ユニオンの夕（大阪）

七月廿日　革郎報

闘タクを途中ですてる朝戻り　タコ坊
やるせない氣持へ今日も酒が來る　同
アイスクリーム湯氣まとに眺め居る　ひろし
わさびどこかカフエのしげき　同
今夜今夜今夜好機會焦慮　革郎
カフエーの隣りに師匠彈いてゐる　同

名賀壽會例會（尼崎）

七月廿九日　於虚白居　玄洋報

席題　田舍　互選

その恩給田舍で暮らす積りなり　きくを
田舍でもラヂオで街の事を知り　吉朗
それそこが田舍者ぢやとしさと云ひ　悅路
高聲で田舍訛りの父が來る　玄洋
田舍から重い土産を送つて來　虚白
この次ぎ柿を送ると嫁の里　眠聲
汽車降りて山道十里母の里　同

席題　夜店

値を聞けば夜店の植木水を掛け　虚白
植木鉢提げて夜店の人を除け　吉朗
空模樣急いで夜店片付ける　きくを
値に惚れて夜店で買ふた鋸であり　玄洋
損をする樣に夜店は恩にきせ　同
ガス臭い中を夜店の人通り　眠聲
ながい風呂夜店へ一寸まわつて來　同
居殘りは夜店の中を通つて來　同

兼題　思案　眠聲選

おしまいは思案にくれて欠伸なり　悅路
斯樣なると知れば思案もあつたもの　玄洋
喰ふ事の思案へ子供眠つて居　きくを
叉噂されて思案が變つて來　吉朗
諦めのつかぬ思案に今日も暮れ　同
どうにでもなれと思案は寢て終い　虚白
思案して結局借りる事に極め　同
（軸）困つてる思案へテニス誘ひに來　眠聲

かほる居偶會（大阪）

八月二日　高橋かほる報

極樂

極樂で又蓮の實にけつまづき　愚陀
極樂へ來てから浮氣起るなり　亂耽
極樂へまだ彼の人が來てくれず　かほる

河童

うで組んで河童柳の下に居る　亂耽
河童同志愛の言葉は泡になり　愚陀
白水がかかつて河童目を覺まし　かほる

お多福

お多福と云はれて女房强く生き　愚陀
ようかんへお多福相をくづすなり　亂耽
お多福の綿入ればかり着て暮し　かほる

編輯後記

▼世界は動きつゝある。進みつゝある。我々川柳家も進まなければならぬ。ぢつとして居れば取殘されて退かねばならぬ。一歩退くことは百歩退くことである。一刻一瞬たりとも怠慢精進を停止することは出來ぬ。時間は一度失へば再たび得ることが出來ぬ。その時間を他人の悪口を言ふことに費やすことは、決して自己に忠實なる由因でない、然るに自己を磨くことを忘れて、他を排し、他を斥ることにのみその全精力を費やして悔ひない川柳家のあることは、柳壇の爲めに決して慶ぶべきことではない、此の悪風潮を排す。それは一人吾人のみではあるまい

▼路郎先生は遂に神經衰弱が重くなられ、八月十七日夜、月評會に出席されながら評をされず北海道に旅立たれて了つた、北海道の清涼な空氣と、暖かい人情は必らずや先生の病魔を退治して下さるものと期待してゐる

▼本號はウンと内容を引きしめて見た。直接川柳に關係のない讀物を出來るだけ少なくした。これが歡迎せられるならば、こうした行き方で内容の充實に努めたいと思つてゐる。

▼社友酒井駒人氏は七月十九日に長男をもうけられて大變喜んで居られます。

▼社友兼重白鷗氏は山口縣防府町で今回獨立して開店された由である。大いに御隆盛ならんことを祈る。

▼社友川合舟々氏は八月十一日に急用で丹後の宮津へ行かれた

▼川上三太郎、河柳雨吉、前田雀郎の三氏は河童派の宗芥川龍之介氏逝いて一年となるので七月廿三日東京向島普茶料理雲水で「河童忌」を催され河童に關する書畫其他珍品を陳列展觀され、河童の句を作られた。

▼大谷五花村氏は八月十六日陸前松島へ家族連れで遊覽され、「松島に小波も立つて面白し」の句を作られた。

▼庄萬よし、安井ひろしの兩君は毎日甲子園へ野球見物に日參し、印度人と間違へられるほど眞つ黑になり、やあ君は誰でしたかれと言はれてヒカーンとしてござる。

▼喜田飯山君より來信あり、青森は川柳家が少ないのでつまりませんと。

▼佐々木三福氏は八月十七日來阪され直ちに萬よし居を訪ひ共に路郎先生を訪問されたが、路郎先生北海道行きの後であつたので月評會に集つた人々と共に大阪へ引き返し、共に一盞傾けた後、萬よし、琴人、加香、革郎の四人が旗亭に於て歡迎會を催し午前三時半までメートルをあげ三福君の酒豪振りに一同敬意を表した。

▼川柳雜誌社、路郎先生、私などに暑中御見舞を賜はつた方々に一々御答禮を申上げたつもりですが、御答禮洩れもあるかと存じます、其方々に誌上を以て御答禮申上げます。（革郎生）

移轉と改號

▼兼重白鷗氏は山口縣防府町宮本八王子町へ移轉

▼池田菱明氏は長春市羽衣町二丁目九號の九へ移轉

▼廣島笑人氏は岡山市南方町三六六日本銀行岡山支店行舍へ移轉

▼藤田藤園氏は好古と改號

▼橋本風鈴坊氏は言也と改號

▼山崎隆三氏は谿康と改號

正誤

八月號川村花菱氏の「寫生といふ事を見つめると云ふ事」の記事中十二頁上段二十三行目路郎先生の句「お父さんやつぱり川柳々々と云つてるよ」は「お父さんはやはり川柳々々と云つてるよ」の誤植である。

七月號花情氏の句「いさかひに勝つた淋しさ瓜を切る」は「爪を切る」の誤植

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第五卷第十一號課題

九月五日締切
（各題十句以内）

▼石炭　森東魚選

▼天井　矢田冷刀選

▼入齒　西本三笑　中川眼隱子　共選

第五卷第十二號課題

十月五日締切
（各題十句以内）

▼臺所　相元紋太選

▼藥局　佐々木三福選

▼暖炉　宮本銀砂子　庄萬よし　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎選

▼古句質疑（三句迄）蛭子省二擔當

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部　金參拾錢
新年特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　一部　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封緘に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和三年八月廿五日印刷
昭和三年九月一日發行

第五卷第九號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤（廣館）石塚
（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅

川柳雑誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　末弘嚴太郎

大道弘雄　伊藤彦造

岡本一平　西原柳雨

片岡直方　大島濤明

嘉納純　岡田三面子

田中辰二　川上三太郎

田中香涯　川村花菱

長崎柳秀　吉岡鳥平

國枝史郎　吉田清

藤村作　武笠山椒

藤本卯之助　安川久流美

小酒井不木　前田雀郎

赤井清司

客員

小出楢重　横田眠聲

木村半文錢　高橋かほる

柴谷柴舟　高見柳骨

篠原春雨　竹内多聞

蛭子省二　矢田冷刀

森東魚　藤里好古

特別社友

岩崎柳路　酒井駒人

喜田飯山　北山悟郎

庄萬よし

岩本素人

原史風

西本三笑

德田双柳

猪野燕柳

太田朝陽　石川双葉子

長谷川一徹

維持社友

本田柳一路　青山孤舟

高橋緑郎　朝田新水

兼重白鷗　水田黄彩

谷村稔　水谷鮎美

辻左馬　嶋田翠峯

中川眼隠子　檜山千代二

中野柳陽　森田笑太郎

中澤濁水

中見光路

中島鐵洲

村松曼平

柳川洲馬

桑原京郎

楊井二南

安西杏三

松丘町二

越村加香

編輯局

（特別社友）

橋本二柳子

合舟々

松盛琴人

麻生馥乃

三好革郎

主幹

安井ひろし

麻生路郎

大阪市南區新戎橋南詰

道頓堀支部　幹事　庄萬よし

大阪市北區北森町三十二

天滿支部　幹事　北山悟郎

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七

濱寺支部　幹事　太田朝陽

神戸市花隈町九六

神戸支部　幹事　楊井二南

山口縣山口町石原小路

山口支部　幹事　柳川洲馬

東京市外杉並町高圓寺八二三

東京支部　幹事　岩崎柳路

函館市青柳町五〇

函館支部　幹事　龜井花童子

大阪市西成區粉濱中町三七二

住吉支部　幹事　德田双柳

朝鮮仁川仲町二丁目八

仁川支部　幹事　矢田冷刀

松江市外川津野津ノ

松江支部　幹事　松丘町二

石川縣小松町備橋詰

小松支部　幹事　本田柳一路

高知市本與力町

高知支部　幹事　中澤濁水

大阪市西淀川區姫島町五二一

姫島支部　幹事　横田眠聲

大阪市外阪急沿線刀根山療養所内

螢ヶ池支部　幹事　安西杏三

金澤市八幡町五三

金澤支部　幹事　中川眼隠子

大阪市東區糸屋町二丁目七

糸屋町支部　幹事　川合舟々

和歌山縣田邊町幽靈松下

田邊支部　幹事　辻左馬

簸川郡今市町本町

簸川支部　幹事　森田笑太郎

豐橋市旭町

豐橋支部　幹事　高橋緑郎

神奈川縣平塚町旭座前

平塚支部　幹事　酒井駒人

兵庫縣加古川町大川町

加古川支部　幹事　水田黄彩

青森市古川町美法二七

青森支部　幹事　喜田飯山

京都市七條大宮東入

京都支部　幹事　桑原京郎

山口縣防府町宮市八王子町

富岡支部　幹事　兼重白鷗

鳥取市川端町二丁目

鳥取支部　幹事　中島鐵洲

大阪市東區北濱一丁目三五

北濱支部　幹事　谷村稔

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾册か求めるうちには幾册かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本 全一册

定價 五十錢 郵稅 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち 妻が待ち

白鶴をチントンヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

內科　呼吸　胃腸　小兒疳

和漢洋醫院

醫學博士　長谷川成一

大阪市長堀橋高島屋前
電話南四一八八番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和三年八月二十五日印刷納本　昭和三年九月一日發行

川柳雜誌　（第五十六號）　定價三拾錢

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入
定價壹圓（送料拾錢）
發行所　大阪市西成區千本通五の七
不朽洞
振替大阪五二五八五番

實に氣持のいゝ本だと云はれてゐますのでよろこんでゐます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。（葭乃）

車中に書齋に氣の利いた贈答品！

川柳とは何ぞや――の數萬言を聽くよりも本書を繙け！
實に愉快に、而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

内容概目

川柳漫畫　累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博した川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題によゝ收錄したるもの――。
「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの――。
「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの――。